仙台市文化財調査報告書第319集

大野田古墳群

—第13次発掘調査報告書—

2008年2月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第319集

大野田古墳群

—第13次発掘調査報告書—

2008年2月

仙台市教育委員会

序　　文

日頃より、仙台市の文化財保護行政に対しまして、ご理解、ご協力をいただき、担当する仙台市教育委員会にとりましては、誠に感謝にたえません。

大野田古墳群は、仙台市の東南部、太白区大野田に広がる面積30haにおよぶ春日社古墳・王ノ壇古墳などの古墳を中心とした遺跡です。この地域は水田が広がる田園地帯でしたが、地下鉄南北線の開業、都市計画道路「川内・柳生線」の開通、さらに土地区画整理事業の進展により、急速に開発、都市化が進行しています。こうした動きの中で、大野田古墳群は昨年度まで12次にわたる発掘調査が実施され、縄文時代から中世に至るまで、連綿と人間の生活の痕跡が残されていることが分かってまいりました。特に古墳時代の埴輪を持った古墳群、古代の官衙遺構群、中世の奥大道と考えられる道路跡の発見などといった大きな成果が得られています。

この度の発掘調査は事務所付マンション建築に伴うもので、第13次の調査となります。地下鉄富沢駅の東約500mの地点で実施したもので、本報告書はその成果をまとめたものであります。

先人たちの残した文化遺産を保護し、活用しながら市民の宝として永く後世に伝えていくことは、これからの「まちづくり」に欠かせない大切なことであります。ここに報告する調査成果が、広く活用され、文化財に対するご理解と保護の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び調査報告書の刊行にあたり、多くの方々のご協力、ご助言をいただきましたことを深く感謝申し上げ、刊行の序といたします。

平成20年２月

仙台市教育委員会
教育長　荒井　崇

例　　言

1．本書は、事務所付共同住宅（(仮称）ＤＣ王ノ檀マンション）建設工事に伴う埋蔵文化財の調査報告書である。

2．発掘調査は、仙台市教育委員会の指導のもとに、株式会社玉川文化財研究所が行った。

3．本書の作成及び編集は、仙台市教育委員会文化財課主浜光朗・工藤信一郎、株式会社玉川文化財研究所小林義典が行った。

4．本書の執筆は、主浜光朗の指導のもとに下記の通り行った。

　第Ⅰ章第１節・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・主浜光朗

　第Ⅰ章第２節、第Ⅱ章～第Ⅵ章・・・・・・・・・・・・・・小林義典

5．調査と報告書作成にあたり、同事建設株式会社、富沢駅周辺開発事務所のご協力を賜った。記して感謝の意を表す次第である。

6．調査及び報告書作成に関する諸記録、出土遺物等の資料は、仙台市教育委員会が保管している。

凡　　例

1．土層注記に記載している土色は、「新版標準土色帖」（小山・竹原 1977）に基づいて認定した。

2．本書に使用した地形図は、国土地理院発行の１:25,000『仙台西南部・仙台東南部』の一部を使用している。

3．第２図は仙台市文化財調査報告書第291集「大野田古墳群－第９次発掘調査報告書－」第２図を加筆転載したものである。

4．第16図は仙台市文化財調査報告書第243集「大野田古墳群・王ノ壇遺跡・六反田遺跡－仙台市富沢駅周辺区画整理事業関係遺跡発掘調査報告書Ⅰ－」第10図・第31図の一部を合成・転載したものである。

5．調査の際の平面座標基準は、日本測地系直角平面座標第Ｘ系を基にしている。

6．本書に使用した遺構挿図縮尺は、平面図1/100、断面図1/60である。

7．本書に使用した遺物挿図縮尺は、1/1・1/2である。

8．遺物の登録は種別ごとに行い、番号の前に以下のような略号を付している。

　Ａ：縄文土器　Ｊ：磁器　Ｓ：埴輪

9．本書で使用した遺構略号は以下の通りである。

　ＳＦ：道路跡　ＳＭ：小溝状遺構　ＳＸ：性格不明遺構　Ｐ：ピット

目　　次

序　文
例　言・凡　例

第Ⅰ章　調査の概要 …… 1
　第1節　調査に至る経緯 …… 1
　第2節　調査要項 …… 1

第Ⅱ章　遺跡の位置と歴史的環境 …… 1

第Ⅲ章　調査の方法と経過 …… 4

第Ⅳ層　基本層序 …… 6

第Ⅴ章　検出遺構と出土遺物 …… 9
　第1節　Ⅱ層上面検出遺構 …… 9
　　1．道　路　跡 …… 9
　第2節　Ⅳ層上面検出遺構 …… 14
　　1．小溝状遺構群 …… 15
　　2．性格不明遺構 …… 21
　　3．ピ　ッ　ト …… 22
　第3節　Ⅴ層上面検出遺構 …… 22
　　1．小溝状遺構群 …… 22
　　2．ピ　ッ　ト …… 26
　第4節　出土遺物 …… 26

第Ⅵ章　ま　と　め …… 28

写真図版 …… 31

報告書抄録 …… 巻末

挿　図　目　次

第１図　遺跡の位置 …… 2
第２図　調査区の位置と周辺の遺跡 …… 3
第３図　グリッド及び周辺調査範囲 …… 5
第４図　北壁及び東壁土層断面図 …… 7
第５図　南壁及び西壁土層断面図 …… 8
第６図　ＳＦ１（新）平面・断面図 …… 10
第７図　ＳＦ１（旧）平面・断面図 …… 11
第８図　ＳＦ２平面・断面図 …… 12
第９図　Ⅳ層上面（Ａ）遺構平面図 …… 16
第10図　Ⅳ層上面（Ａ）遺構断面図 …… 17
第11図　Ⅳ層上面（Ｂ）遺構平面図 …… 18
第12図　Ⅳ層上面（Ｂ）遺構断面図 …… 19
第13図　Ⅴ層上面遺構平面図 …… 24
第14図　Ⅴ層上面遺構断面図 …… 25
第15図　出土遺物 …… 27
第16図　近隣の成果との対応関係 …… 29

表　目　次

第１表　ＳＦ１・２土層観察表 …… 13
第２表　Ⅳ層上面検出遺構観察表 …… 20
第３表　Ⅴ層上面検出遺構観察表 …… 23

写真図版目次

写真図版１　１．ＳＦ１（新）全景（南西から）　２．ＳＦ１・２全景（南西から）
写真図版２　１．ＳＦ１・２土層断面（Ｃ－Ｃ’）（南西から）　２．ＳＦ１・２土層断面（Ｂ－Ｂ’）（南西から）
３．ＳＦ１・２検出状況（南から）　４．ＳＦ１・２検出状況（北東から）
５．Ⅳ層上面ＳＭ１・２完掘全景（南から）
写真図版３　１．Ⅳ層上面ＳＭ１～５完掘全景（南から）　２．Ⅳ層上面ＳＸ１・２完掘全景（西から）
３．Ⅳ層上面ＳＭ１－22～25土層断面（東から）　４．Ⅳ層上面ＳＭ３－７・８土層断面（西から）
５．Ⅳ層上面ＳＭ１～５検出状況（南から）
写真図版４　１．Ⅴ層上面ＳＭ６～９完掘全景（北から）　２．Ⅴ層上面ＳＭ６～９完掘全景（南から）
写真図版５　１．Ⅴ層上面ＳＭ６・７－１・２土層断面（Ａ－Ａ’）（東から）
２．Ⅴ層上面ＳＭ６－４底面工具痕（東から）　３．調査区西壁土層堆積状況（東から）
４．調査区東壁土層堆積状況（西から）　５．出土遺物

第Ⅰ章　調査の概要

第１節　調査に至る経緯

平成19年５月22日付けで、同事建設株式会社より、仙台市太白区大野田字王ノ檀31街区２画地（616㎡）について、表層土壌改良（深さ４ｍ）の基礎工事を伴う事務所付共同住宅建設にかかる「埋蔵文化財の取り扱いについて（協議）」が提出された。

当該地は、大野田古墳群の東側縁辺部で、春日社古墳の東200ｍ、王ノ壇古墳の西南西50ｍの地点に位置している。「富沢駅周辺土地区画整理事業」に伴う平成９年度の発掘調査により、中世の道路跡が本地点の北西部を斜めに横切っていることが確認され、さらに本地点周辺の道路部分の調査区では、下層から小溝状遺構群が検出されていることから、建設工事により地下遺構が損なわれるものと判断し、工事に先立って本発掘調査が必要であるとする旨の回答文を通知した。その後、いく度かの協議を経て、建築面積240㎡を対象に大野田古墳群第13次調査として、同年７月17日より発掘調査を実施することとした。

第２節　調査要項

1	遺跡名称	大野田古墳群（宮城県遺跡地名登録番号01361・仙台市文化財登録番号Ｃ－054）
2	所在地	仙台市太白区大野田字王ノ檀31街区２画地
3	調査原因	事務所付共同住宅（（仮称）王ノ檀マンション）建設工事に伴う埋蔵文化財の事前調査
4	調査主体	仙台市教育委員会（生涯学習部文化財課）
5	調査担当	調査係主査　主浜光朗
		調査係主任　工藤信一郎
		調　査　員　小林義典（株式会社玉川文化財研究所）
6	調査期間	平成19年７月17日～平成19年８月31日
7	調査面積	開発面積　616㎡
		調査面積　231㎡

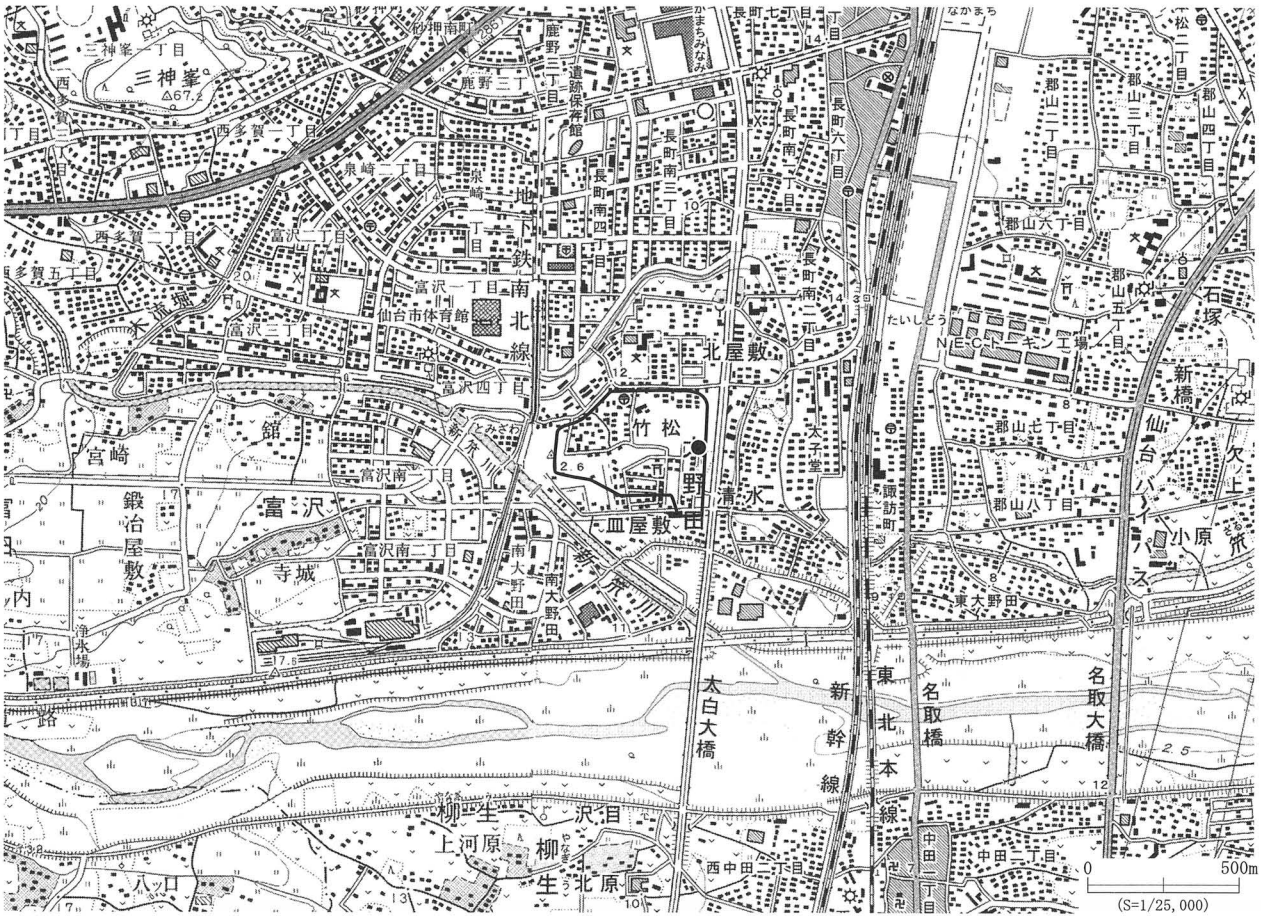
第Ⅱ章　遺跡の位置と歴史的環境

大野田古墳群は仙台市の南東部、太白区大野田字宮・宮脇・王ノ檀ほかに所在し、その範囲は東西600ｍ、南北430ｍを測る。今回の調査地点は古墳群の東縁部に該当し、地下鉄南北線富沢駅の東約500ｍに位置する（第１図）。

仙台市の地形は、西部の丘陵地帯と東部の沖積平野に大きく分けられ、沖積平野の南側、名取川と広瀬川に挟まれた大野田地区を含む一帯は郡山低地と呼称されている。

大野田地区は名取川の左岸に位置し、南側を東流する名取川と北・東を袋状に蛇行・曲流する笊川によって囲まれるため、両河川の影響を強く受けた地形を示している。笊川周辺には旧河道と自然堤防が発達し、その内側には後背湿地が存在することによって複雑に入り組んだ地形を形成している。大野田古墳群及び周辺遺跡の発掘調査で確認されている縄文時代～古代の旧河道はその一端を示している。

当該地区の構成土壌は、砂・砂質シルト・シルトを主体とする河川堆積土であり、笊川の北方に広がる富沢遺跡での泥炭を中心とした低湿地の後背湿地とは異なった環境を示している。また、大野田地区は西から東に緩やかに



第１図　遺跡の位置（●印調査地点）

傾斜しており、笊川・名取川の治水事業以前は冠水の多い地域として知られていた。

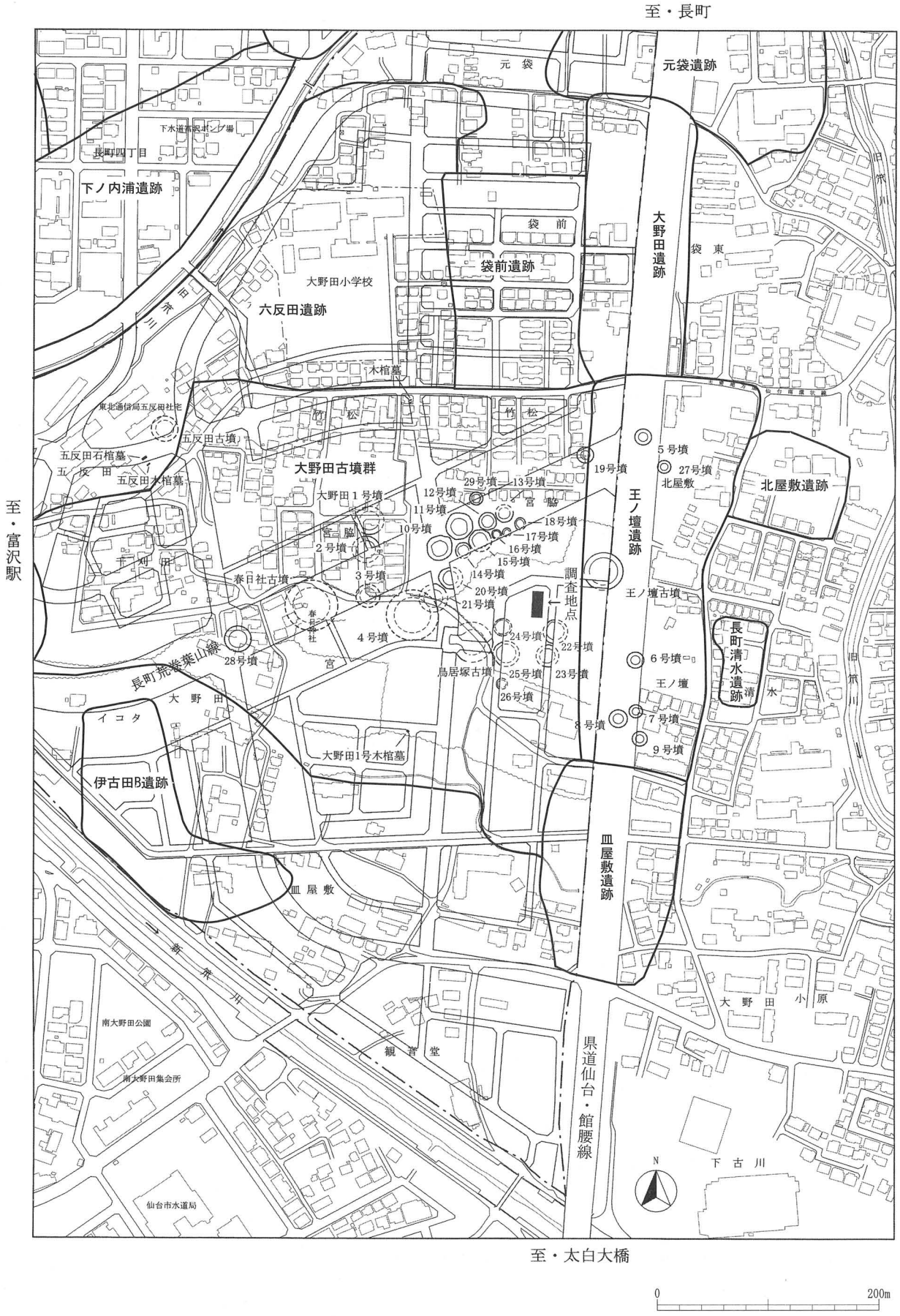
遺跡の東側には現在、南北方向の都市計画道路仙台－館腰線が建設され、富沢駅周辺では土地区画整理事業が進行中である。このため、当該地を含めた事業地内は山砂・砂利等による盛土がなされた造成地となっており、かつての笊川に囲まれた水田・畑地の周辺に住宅が点在するような田園風景や風土環境からは大きく変貌している。

周辺に位置する遺跡としては、大野田地区の自然堤防上には縄文時代中・後期の遺跡の分布が認められており、大野田遺跡では後期前半の環状集石群・配石遺構・埋設土器をはじめとして、多量の土器とともに約300点の土偶が出土し、今回の調査地点の東側に隣接する王ノ壇遺跡では、後期中葉～後半の環状配石群・竪穴遺構・土坑・埋設土器が検出されている。また、本古墳群の北西に位置する六反田遺跡では後期初頭の集落跡が確認され、その北西に位置する下ノ内浦遺跡では後期前半の墓域が検出されている。さらに今回の調査地である大野田古墳群からも後期中葉の土坑が検出されている。

弥生時代には、大野田地区の北側に位置する富沢遺跡において広大な後背湿地に弥生時代中期から水田跡が重層的に検出されており、当時の生産域を示す地域であったと推定されている。

大野田古墳群を含む郡山低地には、古墳時代中期後半になると古墳が出現する。これらの古墳分布域の南側に位置する大野田古墳群は、名取川や笊川によって形成された自然堤防から後背湿地にかけての東西600m、南北300mの範囲に大小の古墳が群集し、これらの古墳には埴輪を伴う例が多く認められている。

大野田古墳群では、現在までのところ41基の古墳が検出されている。これらの古墳分布域のほぼ中央には大形で墳丘部の残る円墳春日社古墳、前方後円墳鳥居塚古墳、東縁部に王ノ壇古墳が位置し、周辺には小規模な円墳が密集して造られているが、西側及び北側での分布は少ない。古墳群の墳丘の大半は削平され、周溝のみが検出される



第２図　調査区の位置と周辺の遺跡（仙台市文化財調査報告書第291集に加筆転載）

ものがほとんどであり、その中でも良好な遺存状態を示す例は春日社古墳のみである。

律令期に入ると郡山低地での集落分布は増大し、大野田地区とその周辺にも住居跡や掘立柱建物跡が多数確認されているほか、平安時代の水田跡やこれら地域のほぼ全域で畑跡の可能性が推定されている小溝状遺構群が多数検出されている。

続いて中世に入ると、郡山低地の中でも大野田地区には武士の屋敷が造営される。今回の調査地点の東側に隣接する王ノ壇遺跡第１次調査では12世紀後半に武家屋敷が成立し、13世紀中頃には内部が大溝により方形に区画され、西側には長さ400mにも及ぶ区画溝が整備され、14世紀前半まで機能したと推定される多数の掘立柱建物跡・井戸跡・池跡の他、塚墓・火葬墓・土坑墓といった宗教関連遺構も確認されている。また、王ノ壇遺跡第２次調査では上述の屋敷跡の西側に同時期の幹線道路（推定「奥大道」）が長さ約360mにわたって検出されたほか、屋敷地への枝道も検出されている。

第Ⅲ章　調査の方法と経過

今回の発掘調査地点は区画整理事業による造成地内にあり、旧耕作土の上部に厚さ0.8m前後の山砂と厚さ0.3m程度の砕石による盛土造成が成されていた。このため、調査にあたっては調査区となる建物本体工事範囲よりも一回り広い範囲の砕石部分を重機により除去することから開始した。その後、その内側に南北23m、東西10mの長方形の調査区を設定し、その範囲に合わせて５m毎に南から北に算用数字、西から東に向かってアルファベットを付した。各々の調査区については各座標交点（座標北に対し）の第１象眼側をＡ－１区、Ｂ－１区のように呼称した。

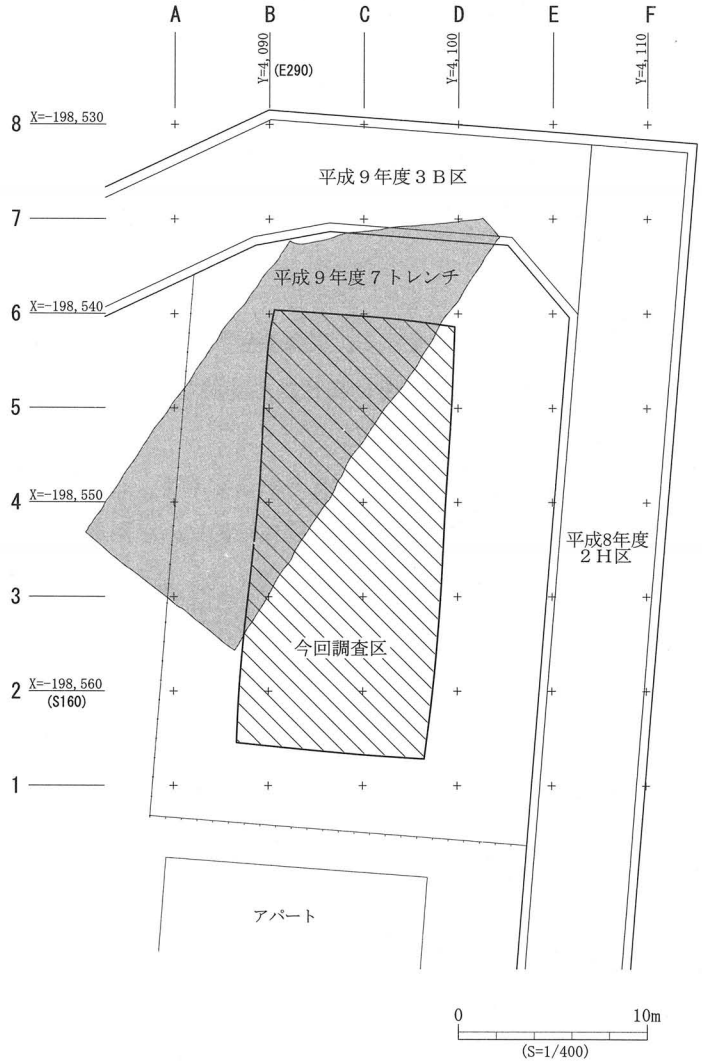
なお、今回の調査区南西端隅Ｂ－２交点（Ｘ＝－198,560．Ｙ＝4,090）は、大野田古墳群を含めた富沢駅周辺遺跡の表記方法ではＥ290・Ｓ160である（第３図）。

調査は、再度重機による旧表土層の掘削を７月17日から開始し、まず中世主要道路の検出面となる褐灰色を呈する粘土質シルトのⅡａ層までの掘り下げを行った。その結果、調査区の北西部分に平成９年度に中世主要道路の平面プラン確認調査が行われた７トレンチが検出され、さらに人力で掘り下げを行ったところ、調査区の北東方向から南西方向に向かう中世主要道路遺構のプランがＰ．Ｐロープで表示された状態で確認された。しかしながら、この道路遺構は今回の調査範囲をかすめるように位置しており、ＳＦ２の西側側溝の大部分は今回の調査区から外れている事が判明した。

今回の調査によって、この中世主要道路遺構は路面となる砂を主体とした数枚の硬化層（面）及び波板状凹凸とその両側を掘削した側溝により構成されている事が確認され、基本的には王ノ壇遺跡第２次調査の内容とは大きく異なる点は認められない。道路線形の大きな変更は行われずに、側溝の浚渫や補修作業により主要道路が長期に渡り維持・管理されていたと推定できる。なお、出土遺物は全体的に少なく、時期を示す遺物としては１点ではあるが13世紀初頭前後～13世紀前半代の中国龍泉窯産蓮弁文青磁碗小片がＳＦ１旧期東側溝下層から出土しているにすぎない。

中世主要道路の調査終了後、Ⅴ層上面を検出面とする小溝状遺構群を検出すべく再度重機によりⅢ層を除去したところ、Ⅳ層上面で予想外の小溝状遺構群及びピットなどの遺構が存在することが明らかとなった。この為、急遽Ⅳ層上面での遺構精査を行うこととした。

この面での主要遺構としては東西方向の小溝が南北方向に列をなす５群からなる小溝状遺構群である。小溝堆積土の違いと重複関係により大きく新旧に分けられ、堆積土が褐色味を帯びるＳＭ１・２が新しく、暗色味の強いＳＭ３・４・５が古い遺構群ということが判明した。各々の小溝状遺構群の条数はＳＭ１が25条、ＳＭ２は20条、ＳＭ３は15条、ＳＭ４は14条、ＳＭ５が２条で構成される。規模としてはやや長さに欠ける部分があり、長いもので



第３図　グリッド及び周辺調査範囲

４ｍ程度、短いものは１ｍ以下の小溝も存在する。

Ⅳ層上面の遺構調査完了後、再び重機による掘り下げを行い、本来の調査面であるⅤ層上面の遺構確認を行った。その結果、南北に列をなす東西方向の小溝状遺構群４群（ＳＭ６～９）とピットを検出した。各々の小溝状遺構群の条数はＳＭ６が９条、ＳＭ７は７条、ＳＭ８は３条、ＳＭ９が２条である。この中でＳＭ６とＳＭ８は重複関係にあり、ＳＭ８の方が新しいことが判明した。なおＳＭ６－４の一部底面には小溝掘削時の三日月状の工具痕も良好な状態で観察された。

現地調査は、各遺構について精査・写真撮影・遺構実測等の作業を行い、８月24日には高所作業車によるⅤ層上面の全体写真撮影を行った。現地作業は、８月24日に仙台市教育委員会文化財課との現地調査終了立ち会いの後、撤収作業を行って８月31日にすべて終了した。

現地での測量・実測図作成についてはトータルステーションによる取り込み・編集を基本とするが、土層断面図についてはアナログ方式の実測方法で行っている。なお、測量の際の座標数値は日本測地系直角平面座標第Ｘ系を基準とした。

第Ⅳ章　基本層序

今回の調査区では全域にわたり、砂利（0.3m）と黄褐色山砂（0.8m）による盛土造成が行われていた。このため、基本層序としては、盛土直下の旧水田耕作土をⅠ層とし、Ⅸ層の砂礫層までを確認した。第４・５図は調査区の外周断面図である。遺構調査は前述したようにⅡ層上面、Ⅳ層上面、Ⅴ層上面で行った。

Ⅰ 層：色調及び含有物等の違いにより、ａ・ｂの２層に細分できる。

Ⅰａ層は盛土造成される以前の水田耕作土である。灰黄褐色（10YR5/2）を呈するシルトもしくは粘土質シルトであり、層厚20cm前後、山砂盛土との境界に酸化鉄の薄層を形成する部分や土色が暗灰青～暗灰緑色に変色する部分が認められる。

Ⅰｂ層はⅠａ層以前の水田耕作土もしくは田床と考えられるもので、にぶい黄褐色（10YR5/4）を呈する砂質シルトである。酸化鉄により全体に橙色味を帯び、層厚は約10cmを測る。

Ⅱ 層：色調・土性・含有物等によりａ・ｂ・ｃ・ｄの４層に分層した。Ⅱ層全体の層厚は約20cm程度を測るが、各層毎の層厚は一定せず、境界面は細かな凹凸となって層の欠落する部分も認められた。土性はいずれも粘土質シルトで径３mm大のマンガン粒を不規則に含んでいる。

土色はⅡａ層がにぶい黄褐色（10YR5/4）、Ⅱｂ層は暗褐色（10YR3/3）、Ⅱｃ層は黒褐色（10YR3/1）、Ⅱｄ層は褐灰色（10YR5/1）を呈する。周辺の調査における植物珪酸体分析では水田耕作土の可能性が指摘されている。

中世主要道路跡は本層上面のⅡａ層から掘り込まれている。

Ⅲ 層：色調及び含有物等の異なりにより、ａ・ｂの２層に細分した。Ⅲａ層の土色は、にぶい黄褐色（10YR5/4）を呈する砂質シルト～粘土質シルトである。層厚20cm前後であり、層中～上位にかけて灰白色火山灰が径10mm前後のブロック状あるいは１～３mm程度の薄層として観察できる。

Ⅲｂ層は層厚10cm前後を測り、灰黄褐色（10YR4/2）を呈するシルト～砂質シルト層であり、Ⅳ層上面で検出された小溝状遺構群の主要堆積土である。Ⅳ層上面との境界は不整合面を形成する。

Ⅳ 層：暗褐色（10YR3/4）を呈する粘土質シルトであり、層厚10～20cmを測る。最上面はⅢｂ層を主要堆積土とする小溝状遺構群の検出面である。また、第５図の西壁断面にも小溝状遺構群に関連する遺構の一部が検出されている。

Ⅳ'層：にぶい黄褐色（10YR4/3）を呈するやや砂質味のある粘土質シルト層であり、Ⅳ層に径５～10mm大のⅤ層粒10％程度が斑文状に混入する。径３～５mm大の炭化物１～３％と極微量の径１mm前後の焼土粒を含有する。Ⅳ層と同様にⅤ層上面検出の小溝状遺構群堆積土であるが、主に調査区南西側に堆積が認められる。

Ⅴ 層：にぶい黄褐色（10YR5/4）を呈する粘土質シルトであり、層厚は約30cmを測る。本層上面がⅣ層を主な堆積土とする小溝状遺構群の確認面となる。

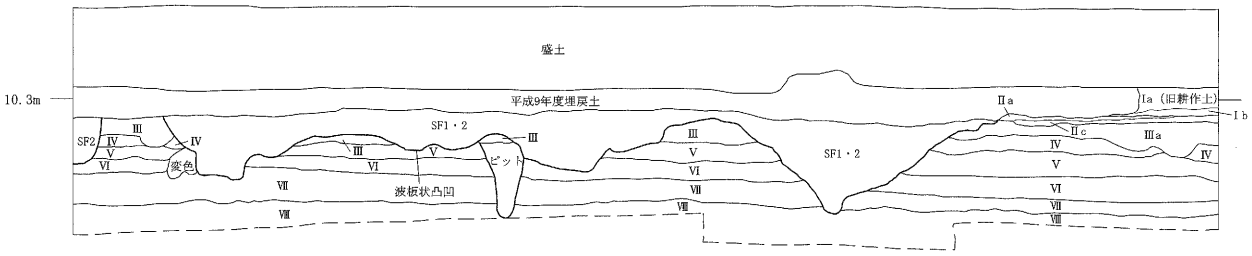
Ⅵ 層：褐色（10YR4/4）を呈するシルト～砂質シルト層、層厚約20cmである。部分的に径１～３mm大の炭化物を含む部分がある。

Ⅶ 層：暗褐色（10YR3/3）を呈する砂質シルト層である。層厚10～15cmを測り、縄文時代後期の遺物を包含する。

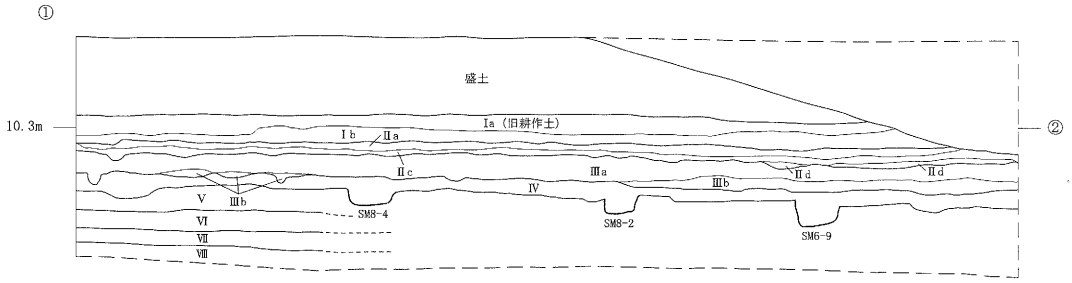
Ⅷ 層：灰黄褐色（10YR4/2）を呈する砂質味の強い砂質シルト層、層厚30～40cmを測る。

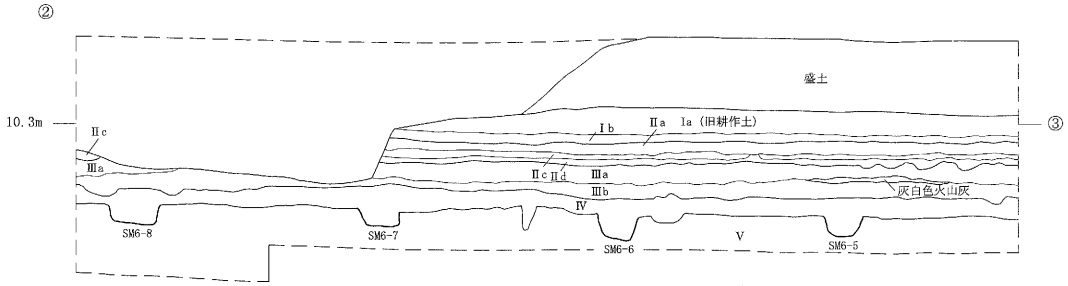
Ⅸ 層：径50～150mm前後の扁平な河原石を主体とした砂礫層である。調査区南東部の深掘区では、礫上面が北側に向って緩やかに傾斜していた。

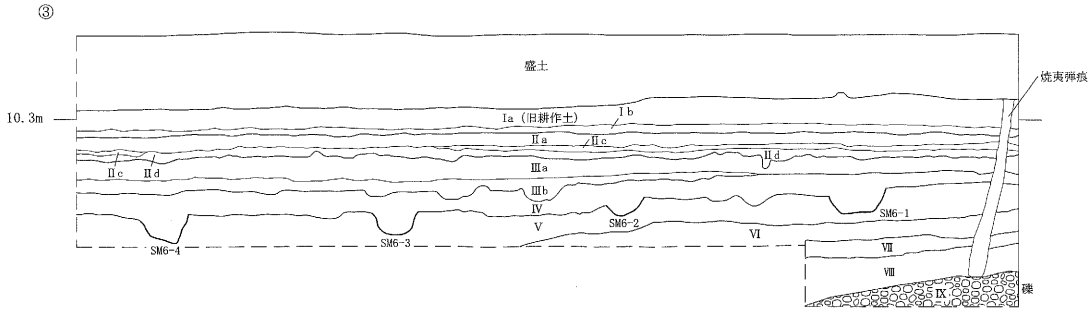
北壁



東壁



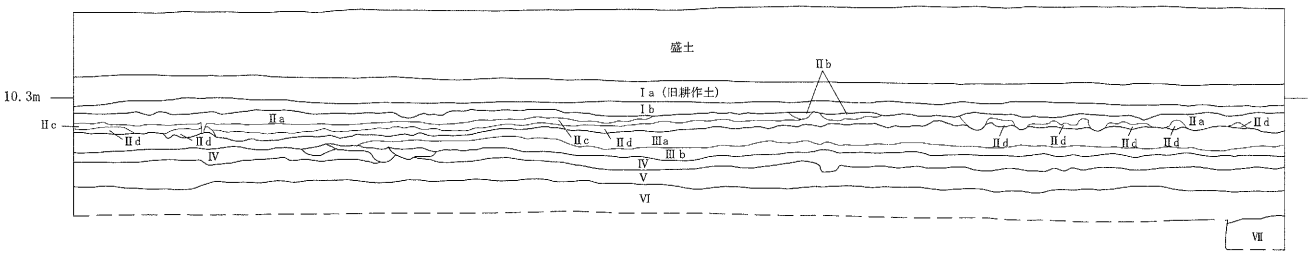




0　2m
(S=1/60)

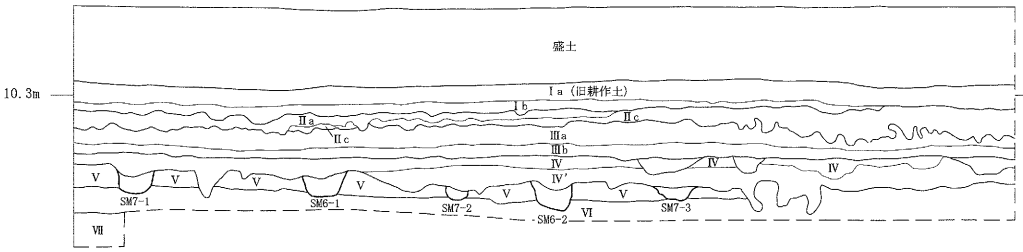
第４図　北壁及び東壁土層断面図

南壁

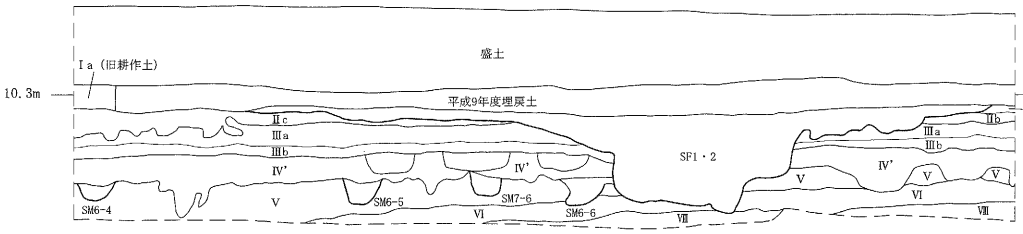


西壁

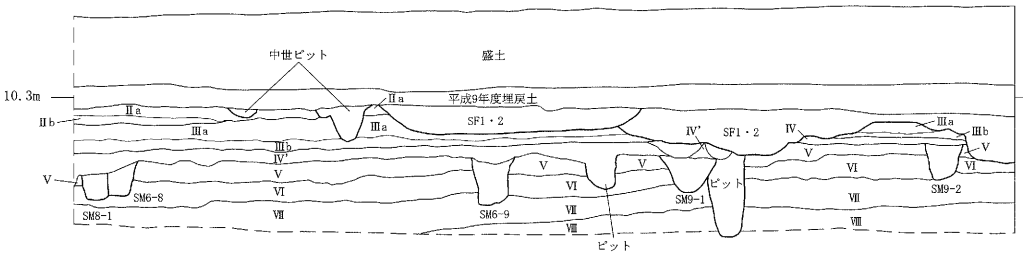
①

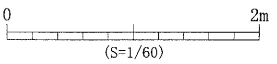


②



③





第５図　南壁及び西壁土層断面図

第Ⅴ章　検出遺構と出土遺物

第１節　Ⅱ層上面検出遺構

Ⅱ層上面で検出された遺構は、平成９年度に発掘調査が実施された王ノ壇遺跡第２次調査によって「奥大道」と推定された道路跡（ＳＦ１・２）である。

今回の発掘調査地点は、平成９年の調査により平面プランのみ確認された７トレンチの東側部分に該当する。道路遺構再検出時には平成９年調査時に張られたＰ．Ｐロープによる縄張りがされた状態であった。なお、今回の調査により道路遺構のうち最も古い西側溝ＳＦ２の大半は調査区外に存在することが確認され、ＳＦ２の西側溝についての詳細は明らかにすることはできなかった。また、北側に位置する平成９年度の６トレンチとの間には、５～６ｍ程度の未調査部分が存在する。

道路跡の各々の呼称（ＳＦ１新期・旧期、ＳＦ２）は、王ノ壇遺跡第２次調査報告（渡辺他 2000）の呼称方法にならって統一性を計ったが、ＳＦ１新期西側溝の東壁を一部壊して今回新たに検出された側溝についてはＳＦ１新期西の東側溝と付し、ＳＦ１新期に含めて記述することとした。

１．道路跡（第６～８図、図版１・２）

道路跡は調査区北西側のＢ・Ｃ－４・５区に検出され、南西－北東方向に路線軸を持つ。道路はその両側に側溝を掘り込み、路面には盛土による硬化面を形成するものである。検出された道路長は調査区内で最大13m、東・西両側溝が明らかなＳＦ１の最大幅は５ｍを計測する。

道路跡の側溝には掘り直しが認められて大きく２時期の変遷が確認され、新しい方をＳＦ１期、古いものをＳＦ２期とした。さらに、ＳＦ１にも側溝の掘り直しと路面の改修が認められたことから、改修後をＳＦ１新期、改修前をＳＦ１旧期とした。

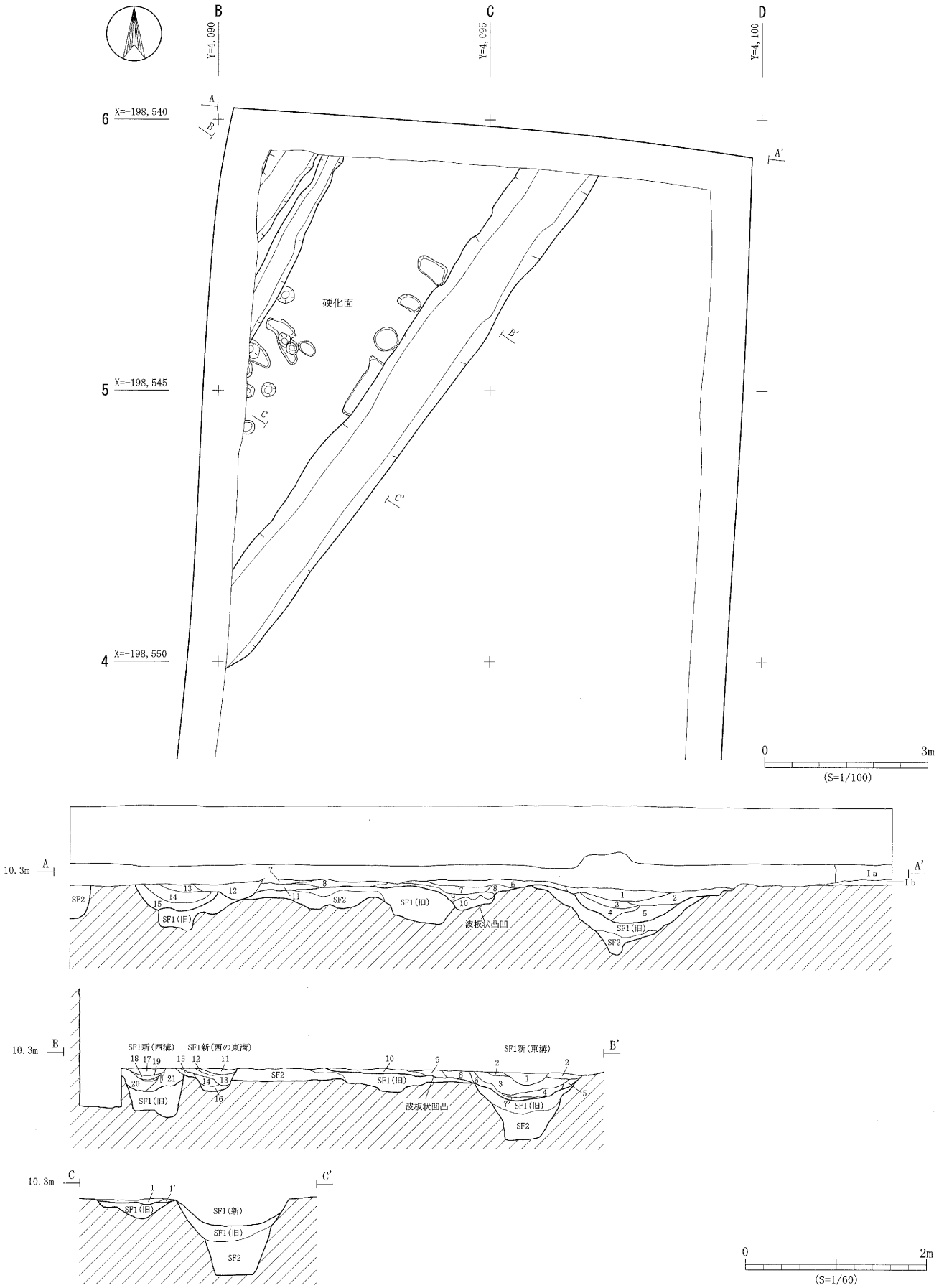
なお、平成９年度調査５・６トレンチで検出されたＳＦ１新・旧東側溝底面とされる硬化面は、今回の調査では確認することが出来なかったが、側溝堆積土と砂を主体とする路面及び波板状凹凸の重複関係の検討から前回と今回の前後関係に矛盾はなく、平成９年度底面の想定は可能であった。

ＳＦ１新期（第６図）

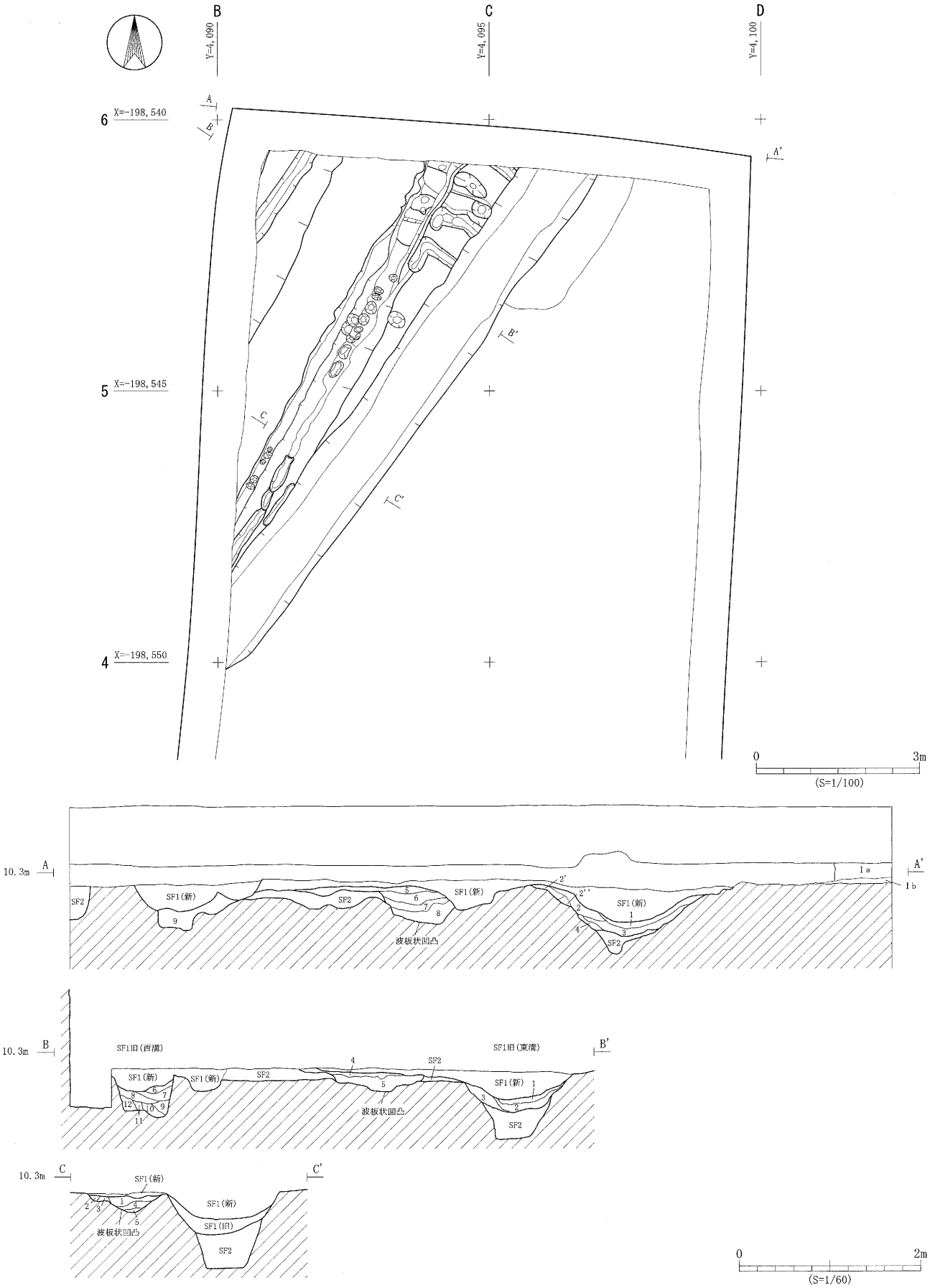
Ⅱ層上面で検出した。路線軸はほぼ南西－北東（Ｎ－35°－Ｅ）であり、硬化面上端の長さは10.1ｍを計測する。西側溝は２条存在し、西側が平成９年度調査の６トレンチＳＦ１新期西側溝に該当し、その東側に平行する形で前述した新たな側溝が掘られており、これを西の東側溝と呼称することとした。

西の東側溝の長軸方向は（Ｎ－26°－Ｅ）を指す。幅は北側0.4m、南側0.6m、深さ0.4mを測り、断面はやや外傾するＵ字状を呈する。ＳＦ１新期西側溝の埋没後に掘り込まれた最新の側溝であり、今回調査区の北側に隣接した平成９年度６トレンチには存在しない側溝である。ＳＦ１新期新と表現するすることも可能であろう。この時期の東西側溝間の幅は北側2.8m、南側2.3mである。堆積土は11～16層に細分でき、12層と14層は２～３㎜の層が互層をなす堆積が顕著である。

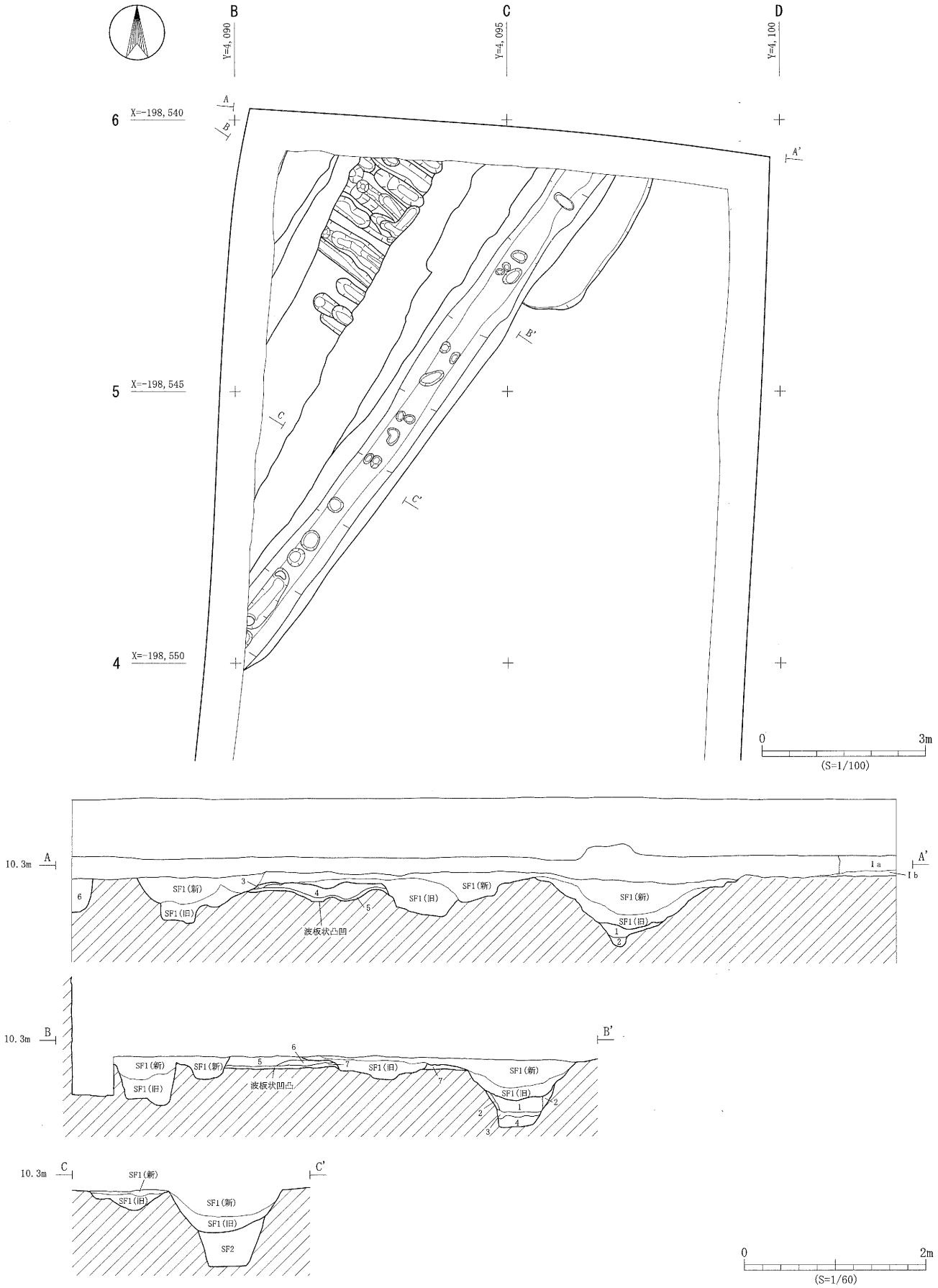
ＳＦ１旧期堆積土を掘り直して構築されたＳＦ１新期西側溝は、長軸方向は（Ｎ－35°－Ｅ）を指し、東側溝の長軸方向と平行する。幅は0.8m、深さ0.3mを測り、断面形は浅いＵ字状を呈する。堆積土は17～21層の５層に分層でき、19層が砂質シルト、それ以外は粘土質シルトであり、21層の最下部には砂粒の２～３㎜の水平堆積が認められた。東・西の側溝間幅は3.1mを測る。



第6図　ＳＦ１（新）平面・断面図



第７図　ＳＦ１（旧）平面・断面図



第８図　ＳＦ２平面・断面図

第１表　ＳＦ１・２土層観察表

遺構番号	層位	土色	土性	備考
ＳＦ１新 A-A'	1	2.5Y5/2 暗灰黄色	粘土質シルト	φ２㎜程のマンガン粒微量に含む。
	2	2.5Y6/2 灰黄色	砂質シルト	互層状堆積。
	3	2.5Y4/2 暗灰黄色	粘土質シルト	２㎜程のマンガン粒少量含む、全体酸化。
	4	2.5Y4/2 暗灰黄色	粘土質シルト	白色火山灰、互層状に含む。
	5	2.5Y4/1 黄灰色	粘土質シルト	Ｖ層の互層状堆積。
	6	2.5Y5/1 黄灰色	砂質シルト	全体酸化。灰白色火山灰を含む。
	7	2.5Y5/1 黄灰色	砂質シルト	細かな互層状。
	8	2.5Y4/3 にぶい黄色	粘土質シルト	φ３㎜程のマンガン粒少量含む。
	9	2.5Y5/4 黄褐色	砂質シルト	砂質強い互層状堆積。
	10	2.5Y4/2 暗灰黄色	砂質シルト	
	11	2.5Y6/3 にぶい黄色	砂質シルト	３～５㎜の互層状、極微量の粘土もしくはシルト含む。
	12	2.5Y5/3 黄褐色	粘土質シルト	φ２㎜以下の白色鉱物を微量に含む。
	13	2.5Y5/4 黄褐色	粘土質シルト	互層状堆積。
	14	2.5Y4/4 オリーブ濁色	粘土質シルト	互層状堆積。
	15	2.5Y5/2 暗灰黄色	砂質シルト	層下端に砂、互層状堆積、白色鉱物少量含む。
ＳＦ１新 B-B'	1	2.5Y5/2 暗灰黄色	粘土質シルト	マンガン粒少量、白色鉱物を含む。 部分的に互層状、植物根酸化。
	2	2.5Y4/3 にぶい黄色	粘土質シルト	マンガン粒少量、白色鉱物、Ⅱ層ブロック少量含む。植物根酸化。
	3	2.5Y5/2 暗灰黄色	粘土質シルト	φ１㎜以下の砂粒を含む。植物根酸化。
	4	2.5Y5/1 黄灰色	粘土質シルト	層上位に砂粒を互層状に含む。φ1㎜程の白色鉱物微量に含む。植物根酸化。
	5	2.5Y4/6 オリーブ褐色	粘土質シルト	Ⅲ層主体、壁崩落。植物根酸化。
	6	2.5Y5/3 黄褐色	粘土質シルト	砂質味強、互層状堆積。植物根酸化。
	7	2.5Y6/2 黄灰色	粘土質シルト	φ1㎜程の白色鉱物極微量に含む。植物根酸化。
	8	2.5Y6/3 砂質粘土	砂質粘土	砂質味極強い。
	9	2.5Y6/4 にぶい黄色	砂質シルト	左傾する５～３㎜の互層状堆積。
	10	2.5Y6/4 にぶい黄色	砂質シルト	水平な１～２㎜の互層状堆積。
	11	2.5Y4/4 オリーブ褐色	粘土質シルト	φ１㎜以内の白色鉱物粒子極微量に含む。
	12	2.5Y4/2 暗灰黄色	粘土質シルト	灰白色の１㎜以下の薄層互層状堆積。
	13	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色	粘土質シルト	φ１㎜以下の砂粒、白色鉱物を微量に含む。 植物根による酸化、灰色味帯びる。
	14	2.5Y3/2 黒褐色	粘土質シルト	互層状堆積、白色鉱物極微量。黄灰色シルトを含む。
	15	2.5Y5/4 黄褐色	粘土質シルト	粘土ブロックと白色鉱物極微量に含む。植物根酸化。
	16	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色	粘土質シルト	灰色味帯びる。
	17	2.5Y5/2 暗灰黄色	粘土質シルト	φ３㎜のマンガン粒少量、φ１㎜程の白色鉱物微量に含む。 植物根による酸化、全体斑紋状。
	18	2.5Y5/4 黄褐色	粘土質シルト	φ１㎜程の白色鉱物極微量に含む、植物根酸化。
	19	2.5Y5/3 黄褐色	砂質シルト	砂質味強い、φ1㎜以下の砂粒を含む、互層状堆積。
	20	2.5Y4/3 オリーブ褐色	粘土質シルト	φ１～２㎜の白色鉱物少量、Ⅱ層ブロック状に含む。
	21	2.5Y5/2 暗灰黄色	粘土質シルト	白色鉱物微量、層下部に砂粒含む。
ＳＦ１新 C-C'	1	2.5Y4/3 オリーブ褐色	粘土質シルト	φ１㎜程の白色鉱物、砂粒微量に含む。酸化。
	1'	2.5Y4/3 オリーブ褐色	粘土質シルト	粘土互層状褶曲。

遺構番号	層位	土色	土性	備考
ＳＦ１旧 A-A'	1	2.5Y4/2 暗灰黄色	砂質シルト	白色火山灰含む、３～５㎜互層状堆積。
	2	2.5Y5/2 暗灰黄色	砂質シルト	白色火山灰多量に含む。
	2'	2.5Y6/2 灰黄色	砂質シルト	全体酸化。
	2"	2.5Y4/3 オリーブ濁色	粘土質シルト	細粒の白色鉱物と微量のマンガン粒を含む。
	3	2.5Y6/1 黄灰色	砂質シルト	層下端に暗灰褐色ブロックの濃集。
	4	2.5Y7/3 浅黄色	砂質シルト	砂（火山灰）互層状堆積。
	5	2.5Y5/3 黄褐色	砂質シルト	層右側硬化面（全体酸化）
	6	2.5Y5/2 黄灰色	砂質シルト	砂質味強い、層下部強い酸化。
	7	2.5Y4/2 暗灰黄色	砂質シルト	砂粒微量含む。
	8	2.5Y4/3 オリーブ濁色	粘土質シルト	火山灰、互層状堆積。
	9	2.5Y4/2 暗灰黄色	粘土質シルト	互層状堆積、白色火山灰を含む。
ＳＦ１旧 B-B'	1	2.5Y4/2 暗灰黄色	粘土質シルト	互層状で波状。植物根酸化。
	2	2.5Y4/1 黄灰色	粘土質シルト	互層状で波状。植物根酸化。
	3	2.5Y4/2 暗灰黄色	粘土質シルト	φ２㎜のマンガン粒微量に含む、植物根酸化。
	4	2.5Y6/4 にぶい黄色	砂質シルト	右側に粘性有り。
	5	2.5Y6/4 にぶい黄色	砂質シルト	互層をなさない砂堆積。
	6	2.5Y5/3 黄褐色	砂質シルト	層中程に砂粒、白色鉱物微量に含む。酸化。
	7	2.5Y4/2 暗灰黄色	砂質シルト	φ１㎜以内の白色鉱物を極微量に含む。酸化。
	8	2.5Y4/3 黄灰色	粘土質シルト	砂粒少量、φ１㎜の白色鉱物極微量に含む。
	9	2.5Y4/1 黄灰色	砂質シルト	砂質度強、φ３㎜のマンガン粒含む。酸化。
	10	2.5Y3/2 黒褐色	粘土質シルト	層中程に砂ラミナ状、酸化度強。
	11	2.5Y4/3 オリーブ褐色	粘土質シルト	φ１㎜程の白色鉱物極微量に含む、植物根酸化。
	12	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色	粘土質シルト	φ１㎜程の白色鉱物極微量に含む、植物根酸化。
ＳＦ１旧 C-C'	1	2.5Y4/2 暗灰黄色	粘土質シルト	φ１～２㎜の白色鉱物、砂粒極微量に含む。
	2	2.5Y4/4 オリーブ褐色	粘土質シルト	φ１㎜程の白色鉱物極微量に含む、酸化鉄付着。
	3	2.5Y6/6 明黄褐色	粘土質シルト	φ１㎜程の白色鉱物極微量に含む。
	4	10YR5/6 黄褐色	粘土質シルト	Ⅲ層主体。
	5	10YR4/6 褐色	粘土質シルト	Ⅱ層を層中央に互層状に混入。
ＳＦ２ A-A'	1	2.5Y4/4 オリーブ濁色	粘土質シルト	全体酸化。
	2	2.5Y4/4 オリーブ濁色	砂質シルト	φ３㎜以下のマンガン粒少量含む。
	3	2.5Y5/4 黄褐色	砂質シルト	砂質味極強い。
	4	2.5Y5/1 黄灰色	砂質シルト	互層状堆積、若干の粘土もしくはシルト含む。
	5	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色	粘土質シルト	粘土、均一な層。
ＳＦ２ B-B'	1	2.5Y5/2 暗灰黄色	粘土質シルト	粘土と砂の波状互層、Ⅱ層ブロックを含む。酸化。
	2	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色	粘土質シルト	Ⅱ層主体でⅤ層を含む。壁崩落土。酸化。
	3	2.5Y4/6 オリーブ褐色	粘土質シルト	層中位に３～５㎜厚の細粒砂が水平堆積、φ１㎜程の白色鉱物極微量に含む、植物根酸化。
	4	2.5Y4/4 オリーブ褐色	粘土質シルト	φ２㎜のマンガン粒、層左側中位にⅡ層ブロックを含む。植物根酸化。
	5	2.5Y6/4 にぶい黄色	砂質シルト	１～３㎜の互層状堆積。
	6	2.5Y3/3 にぶい黄色	粘土質シルト	ＳＦ１旧波板状凹凸堆積土。
	7	2.5Y4/3 オリーブ褐色	粘土質シルト	ＳＦ２期土堆積。

ＳＦ１旧期堆積土を掘り込んで構築された東側溝の長軸方向は（Ｎ－35°－Ｅ）を指す。幅は北側1.5m、南側1.3m、深さ0.3～0.4mを測り、断面形は皿状を呈する。堆積土は北壁土層断面Ａ－Ａ’で１～５の５層、土層断面Ｂ－Ｂ’で７層に細分できる。

東西の側溝の間には、厚さ５～10㎝の砂を主体とした道路面と考えられる硬化した盛土層が認められ、土層断面Ａ－Ａ’で６層の１層、土層断面Ｂ－Ｂ’では８～10層の３層に分層された。これらの硬化面は、土層断面Ａ－Ａ’ではＳＦ１新期の波板状凹凸と道路面と推定できる砂を主体とする硬化層（Ａ－Ａ’７～10層）を被覆する状態であり、路面の東側に主に盛土されていた。側溝間の幅は3.3m前後である。

ＳＦ１旧期（第７図）

ＳＦ１新期側溝堆積土及び硬化層を除去した後に検出した。ＳＦ１新期波板状凹凸により旧期波板状凹凸上部が削平されていた。

西側溝はＳＦ１新期側溝の下部から検出され、長軸方向はＳＦ１新期同様（Ｎ－35°－Ｅ）である。幅0.8m、深さ0.45mを測り、断面はＵ字状を呈する。底面東側半分が10㎝前後深い段差を有する。土層断面Ｂ－Ｂ’の堆積土

観察では６～12層に分層され、７・９が砂質シルト、それ以外は粘土質シルトである。

東側溝はＳＦ１新期東側溝の下部より検出された。長軸方向はＳＦ１新期同様（Ｎ－35°－Ｅ）である。幅は1.2ｍ前後、深さはＳＦ１新期に上部を削平されるため不明瞭な点もあるが、道路面までをその深さとすれば0.4～0.5ｍ前後であったものと考えられる。断面形は皿状を呈する。

東西の側溝の間には、東側半分に厚さ５～10㎝の砂粒を主体とするこの時期の道路造成と考えられる硬化層が確認され、土層断面Ａ－Ａ'の５層がそれに該当する。本層はＳＦ１旧期波板状凹凸を被覆し、後述するＳＦ２の硬化面と波板状凹凸も削平している。

東側側溝の西側には、側溝に接して道路軸に沿ってＳＦ１旧期波板状凹凸が検出された。幅0.6ｍ前後の溝状の掘り込みと径10～20㎝のピット状の掘り込みを連結させた構造を持ち、底面は硬化した状態であった。また、これらの波板状凹凸は、平成９年の６トレンチの波板状凹凸のＣ列と報告された遺構の延長線上に位置し、形状も類似している点からも同一時期に構築された可能性がある。東西の側溝間隔は3.3ｍ前後である。

ＳＦ２（第８図）

ＳＦ２西側側溝は土層断面Ａ－Ａ'の西端に確認され、調査区の北西隅にその東端の一部が確認されたにすぎず、大半は調査区外に外れるために規模や形状については明らかではない。

東側溝はＳＦ１下部から検出された。長軸方向はＳＦ１新・旧期同様（Ｎ－35°－Ｅ）である。上端幅はＳＦ１旧期側溝により削平されるために不明瞭な点もあるが、1.2ｍ前後であったと考えられる。下端幅は0.4～0.6ｍを測り、断面形は上方が大きく開く逆台形を呈し、深さは0.7ｍ前後を測る。なお、底面には、径20～30㎝・深さ10～30㎝の円形・楕円形を呈するピットが掘り込まれており、ＳＦ１新・旧期との差異が認められる。堆積土は土層断面Ｂ－Ｂ'で４層に分層できる粘土質シルトである。

東西の側溝の間には、ＳＦ１の新旧西側溝とＳＦ１旧期波板状凹凸により削平された状態で５～10㎝の砂粒を主体とする硬化層が西側半分に検出された。また、その下層には道路軸線と直行させた幅20～30㎝の溝が密接して配置された波板状凹凸が検出された。底面には浅いピット状の掘り込みがあり、硬化した状態が認められた。東西の側溝間隔は3.5ｍ前後である。

なお、東側溝の北東部に接して深さ５～10㎝程の土坑状の浅い掘り込みが存在する。道路遺構と同様にⅡ層上面を確認面とする遺構であり、側溝上部の堆積土と類似することから、道路遺構に関連する遺構と推定される。

第２節　Ⅳ層上面検出遺構

Ⅳ層上面では、５群からなる小溝状遺構群（ＳＭ１～５）、２基の性格不明遺構（ＳＸ１・２）、ピット18個を検出した。

検出した小溝状遺構群は、南北方向に列をなす東西方向の小溝により構成される。これらの溝は重複関係と堆積土の特徴及び分布状態から大きく新旧に分けられ、堆積土がオリーブ褐色を呈するＳＭ１・２が新しく、褐色～灰黄褐色を示すＳＭ３・４が古い小溝群と推定できる。

Ⅳ層上面で検出した小溝状遺構群は、後述するⅤ層上面検出の小溝状遺構群と比べて小溝の長さが１～４ｍ前後と短いことが特徴的である。周辺調査での類似遺構としては、大野田古墳群（仙台市教育委員会 2000）報文中にⅢ層上面で27例、Ⅳ層上面に１例が報告されており、これら遺構群に対してピット列と呼称しているが、本報告では溝が列状をなして遺構を構成する点を重視して小溝状遺構群として報告する。

１．小溝状遺構群

検出した５群の小溝状遺構群は重複関係を有していた。直接的な重複関係を示せば古→新の順でＳＭ５→ＳＭ１、ＳＭ４→ＳＭ１、ＳＭ３→ＳＭ２、ＳＭ２→ＳＭ１となり、ＳＭ１～５の新旧関係は古→新の順からＳＭ５→ＳＭ４→ＳＭ３→ＳＭ２→ＳＭ１であるが、小溝状遺構群の堆積土の類似・差異及び遺構群の分布からは大きく（Ａ）と（Ｂ）の２期に大別できる可能性が高く、古→新の順でＳＭ３・４・５（Ⅳ層上面（Ｂ）遺構－第11図）→ＳＭ１・２（Ⅳ層上面（Ａ）遺構－第９図）との想定が可能である。

ＳＭ１　小溝状遺構群１（第９・10図、図版２・３）

調査区中央やや東寄りのＢ・Ｃ－１～５区に分布する。ほぼ南北方向（Ｎ－８°－Ｅ）に列をなす東西方向の小溝25条により構成されるが、ＳＭ１－１～13の小溝の長軸方向は（Ｎ－90°－Ｅ）、それ以北のＳＭ１－14～24の小溝の長軸方向は（Ｅ－10°－Ｓ）を指して若干の変差は存在するが、第９図に示した平面分布や各々の小溝堆積土に異なりが認められない点から一群の遺構として捉えた。

各々の小溝間隔は0.5m前後、調査区内での小溝状遺構群延長は17.5mである。小溝の長さは0.5～4.5mを測るが、２m前後の小溝が主体をなす。南端のＳＭ１－１は略円形、北端のＳＭ１－24は略楕円形を呈し、長さ１m前後とそれ以外に比べて小規模である。また、ＳＭ１－２・９・10～16の９条の小溝は、小溝長軸上に土坑状の掘り込み、もしくはピット状の掘り込みが連鎖して各々の小溝を構成している。

小溝の幅は0.3～0.5m前後、深さ５～25cm前後を測るが、底面は概して凹凸面を形成する場合が多く、土坑状やピット状を呈する部分があり、同一の小溝でも深浅のばらつきが存在する例が多い。

本群の小溝堆積土は、オリーブ褐色（2.5Y4/3）を呈するⅢｂ層を主体とした砂質シルトの単一層である。全体は灰色味を帯び、５～15mm大のブロック構成の集合体である。粒径１mmまでの白色半透明鉱物を極微量に含み、植物の根に鉄分が付着した細環状の痕跡が顕著である。本小溝状遺構群から遺物は出土していない。

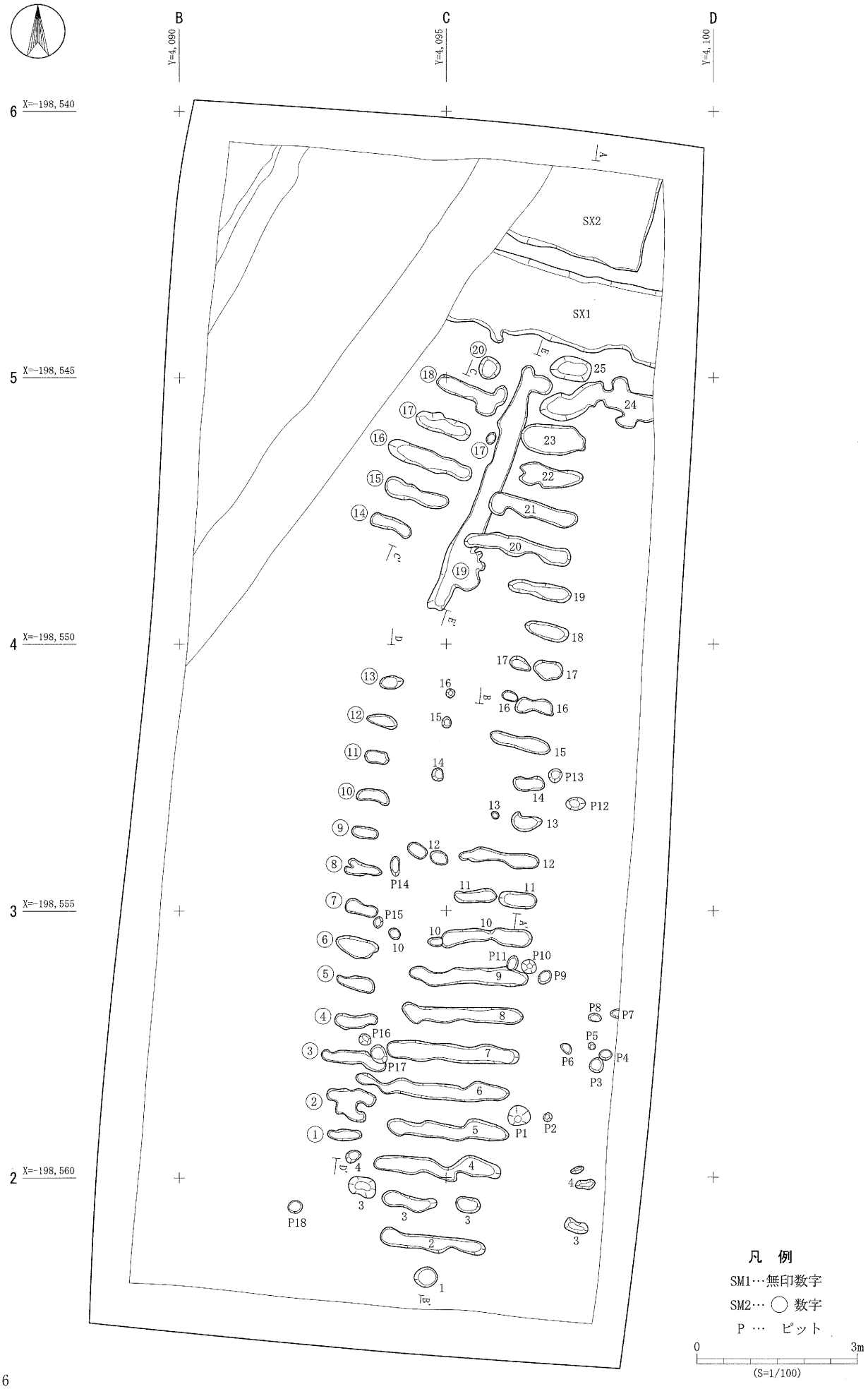
ＳＭ２　小溝状遺構群２（第９・10図、図版２・３）

調査区中央やや西寄りのＢ・Ｃ－２～５区に分布し、ＳＭ１の西側にほぼ並列して分布する小溝状遺構群である。ほぼ南北方向（Ｎ－10°～20°－Ｅ）に列をなす。ほぼ東西方向の小溝19条（ＳＭ２－１～18・20）とＳＭ－14～18・20の東側に長軸が北北東－南南西（Ｎ－20°－Ｅ）を指すＳＭ２－19の合わせて20条により構成されている。

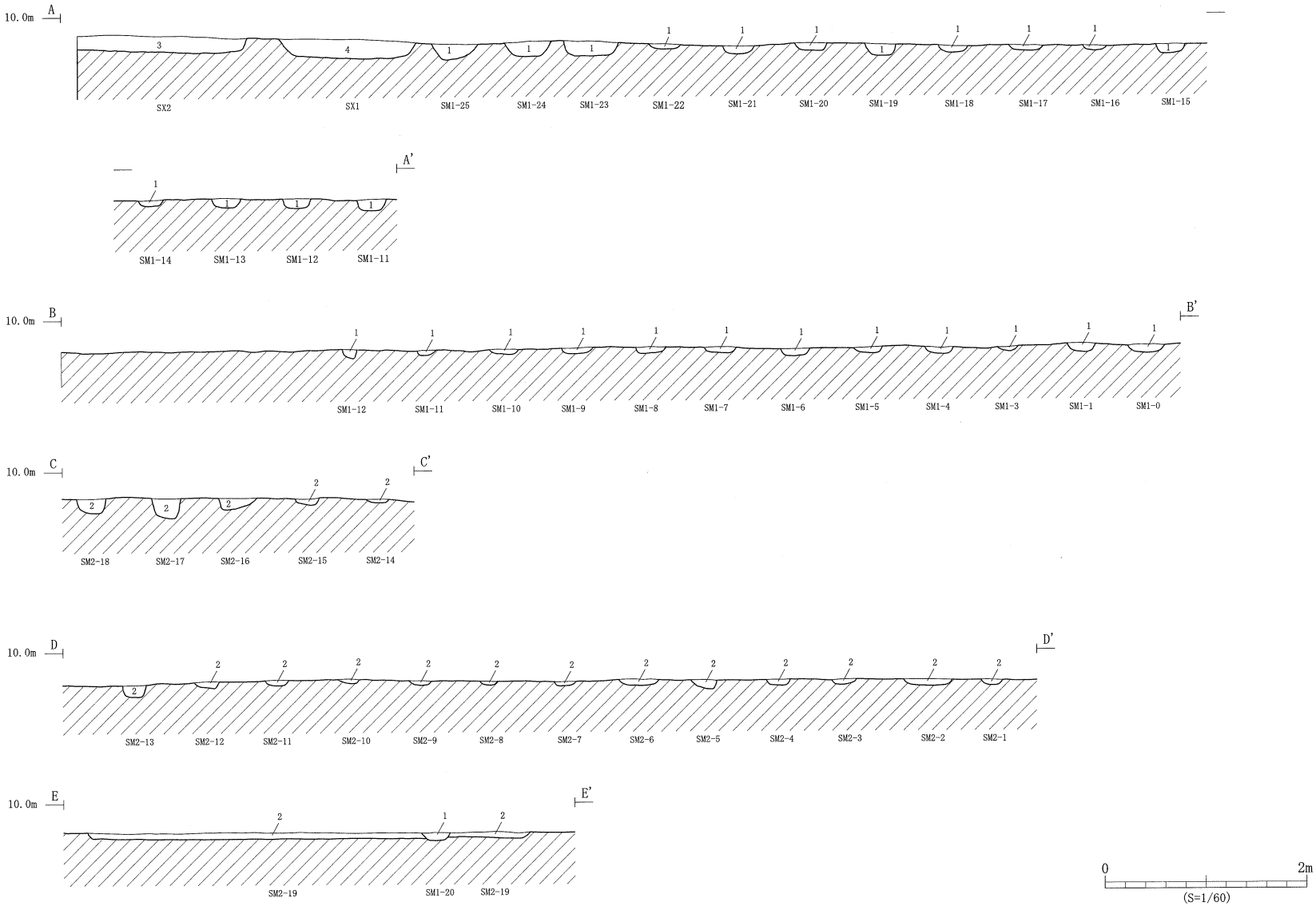
ＳＭ２－１～13の小溝の長軸方向は（Ｅ－10°－Ｓ）、それ以北のＳＭ２－14～18・20の長軸方向は（Ｅ－20°－Ｓ）を指し、若干の差異が認められるほか、ＳＭ２－13と14間には約2.5mの間隔が存在するため、ＳＭ２－１～13とＳＭ２－14～20を別遺構群として捉えることも考慮したが、各々小溝群の堆積土の同一性から一群の遺構として捉えた。また、ＳＭ２－19についても他の小溝とは長軸方向が90°前後異なることから別遺構の可能性も考えたが、堆積土が他の小溝と類似し、西側に隣接するＳＭ２－14～18・20と重複せずに規則性を持って掘り込まれていることから、ＳＭ２－14～18・20の東側を画する小溝と推定した。

各々の小溝間隔は前述したＳＭ２－13とＳＭ２－14間を除けば0.5m前後、調査区内での小溝状遺構群延長は15mである。小溝長軸の長さは、東西方向のＳＭ２－１～18・20が0.5～1.7mを測るが、１m前後の小溝が中心である。小溝幅は0.2～0.4m前後、深さ10～25cm前後を計測する。長軸方向を南南西－北北東に持つＳＭ２－19の長さは５m、幅0.5m、深さ15cm前後である。底面は凹凸面を形成する場合が多く、ピット状を呈する部分があり、同一の小溝でも深さが一定でない場合が多い。

本群小溝堆積土は、オリーブ褐色（2.5Y4/4）を呈するⅢｂ層を主体とした砂質シルト層の単一層であるが、Ⅳ層の含有量がＳＭ１に比べて多いために色調が暗い。植物の根に鉄分が付着して酸化した細環状の痕跡が顕著であ

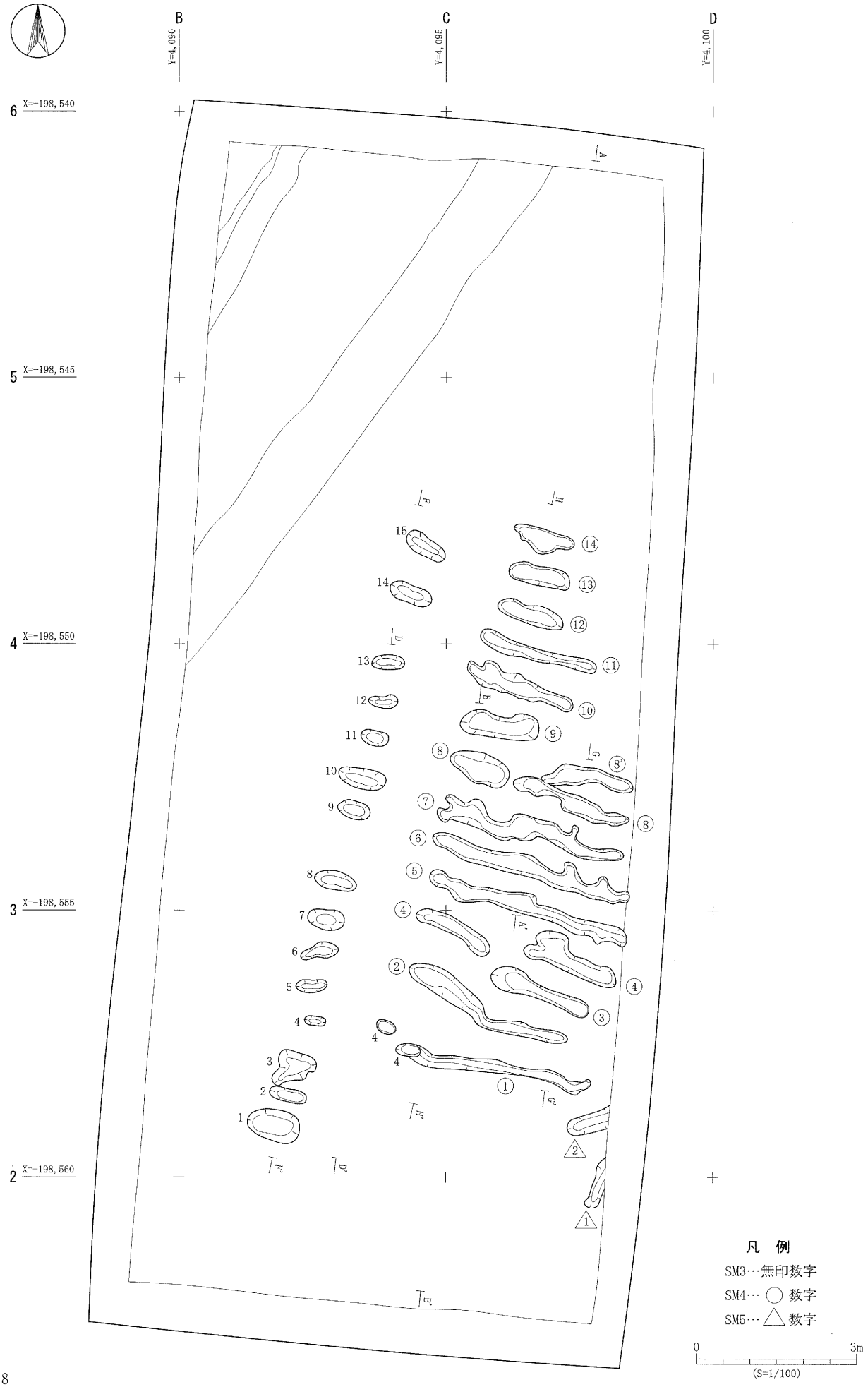


第９図　Ⅳ層上面（Ａ）遺構平面図

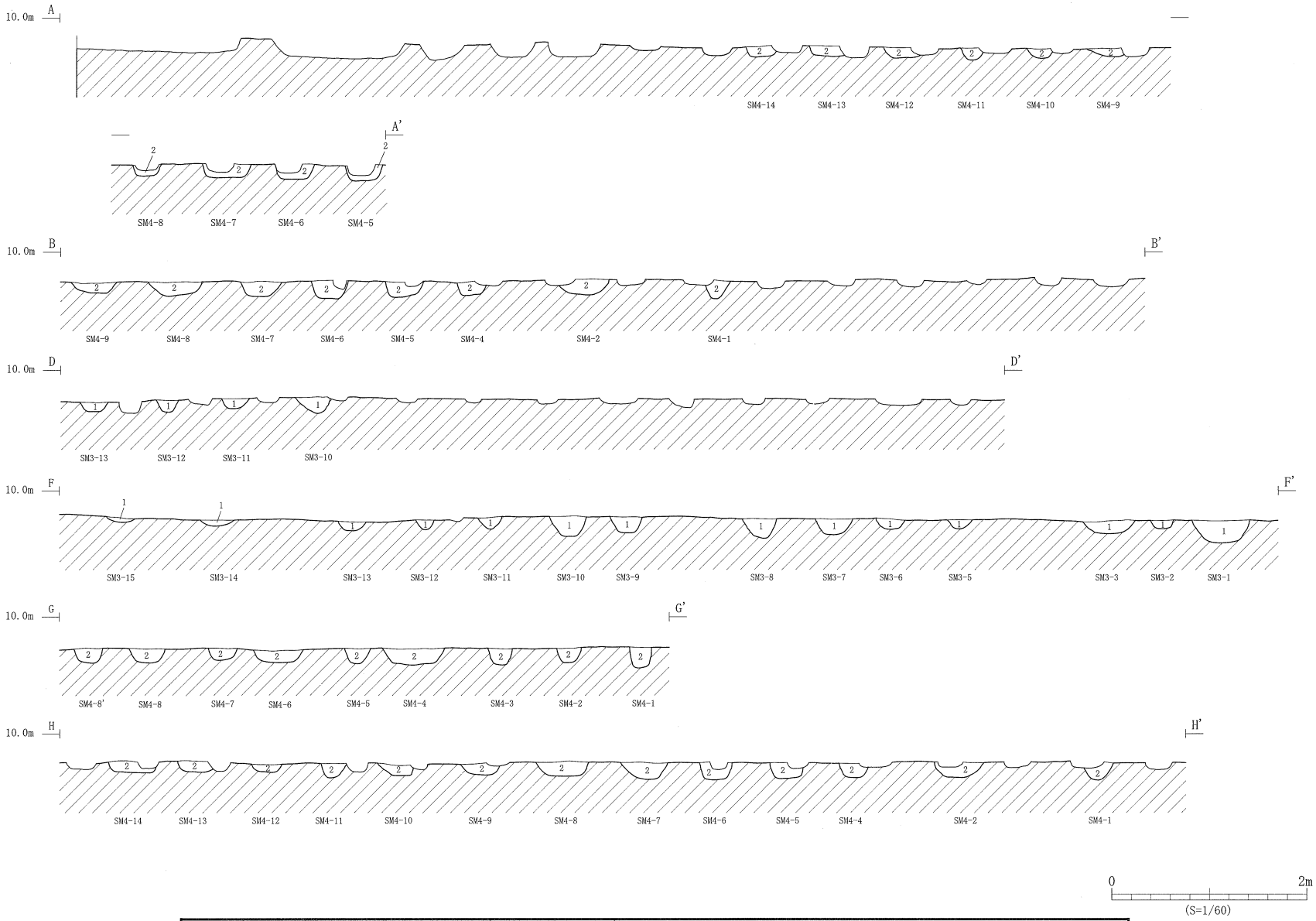


遺　構	層　位	土　色	土　性	備　考
SM1	1	2.5Y4／3　オリーブ褐色	砂質シルト	Ⅲ層下部主体で酸化により暗錆橙色、斑文状。
SM2	2	2.5Y4／4　オリーブ褐色	砂質シルト	1層類似、灰色味があり白色鉱物微量に含む。
SX1	3	2.5Y4／6　オリーブ褐色	砂質シルト	1層類似、白色鉱物極微量に含む。
SX2	4	10Y4／6　褐色	粘土質シルト	φ5～10mmのブロック主体、白色鉱物極微量に含む。

第10図　Ⅳ層上面（A）遺構断面図



第11図　Ⅳ層上面（B）遺構平面図



遺構	層位	土色	土性	備考
SM3	1	10YR4／4 褐色	粘土質シルト	φ2～20mm大のⅢ層ブロック・斑文状砂粒極微量に含む。
SM4	2	10YR4／2 灰黄褐色	粘土質シルト	灰色味強く、暗色化したⅢ層下部主体。錆橙色の斑文。

第12図　Ⅳ層上面（B）遺構断面図

第２表　Ⅳ層上面検出遺構観察表

遺構名	溝番号	長さ×幅×深さ（cm）	特　徴
ＳＭ１	1	44×40×7	略円形を呈する。
	2	199×31×13	
	3	457×36×15	四分割。
	4	470×39×9	四分割。
	5	230×36×10	
	6	290×36×6	
	7	250×38×9	
	8	226×34×11	
	9	224×36×16	
	10	270×33×13	二分割。
	11	105×30×5	二分割。
	12	247×28×9	三分割。
	13	95×32×8	二分割。
	14	214×25×8	二分割。
	15	210×30×9	二分割。
	16	205×30×5	三分割。
	17	100×35×8	二分割。
	18	85×32×8	
	19	120×32×12	
	20	202×38×5	
	21	168×44×11	
	22	120×45×5	
	23	122×56×10	
	24	(214)×70×14	
	25	76×44×13	
ＳＭ２	1	28×24×6	
	2	92×56×7	２条がＹ字状に連結。
	3	122×25×7	
	4	80×28×6	
	5	74×28×5	
	6	79×38×5	
	7	62×28×4	
	8	68×27×5	２条がＹ字状に連結。
	9	50×21×4	
	10	60×21×7	
	11	45×22×4	
	12	58×24×7	
	13	44×24×13	
	14	81×24×4	１～13と軸が異なる。

遺構名	溝番号	長さ×幅×深さ（cm）	特　徴
ＳＭ２	15	123×29×9	１～13と軸が異なる。
	16	166×35×9	１～13と軸が異なる。
	17	154×32×14	１～13と軸が異なる。二分割。
	18	122×27×11	１～13と軸が異なる。
	19	489×39×10	14～18と直交する軸。
	20	42×40×10	略円形を呈する。
ＳＭ３	1	99×58×21	
	2	70×23×8	
	3	72×70×13	２条がＶ字状に連結。
	4	226×17×7	三分割。
	5	57×24×9	
	6	72×33×10	
	7	69×38×15	
	8	80×34×21	
	9	62×33×13	
	10	89×39×20	
	11	52×28×12	
	12	54×25×13	
	13	61×28×10	
	14	82×32×7	
	15	83×36×11	
ＳＭ４	1	(343)×24×23	
	2	325×42×16	
	3	194×46×17	
	4	395×36×16	二分割。２条がＹ字状に連結。
	5	388×30×18	
	6	385×39×18	
	7	357×33×18	２条がＹ字状に連結。
	8	354×53×18	
	8′	151×26×20	
	9	147×50×14	
	10	211×34×14	２条がＹ字状に連結。
	11	225×24×20	
	12	128×39×14	
	13	116×36×12	
	14	116×46×13	
ＳＭ５	1	(70)×(24)×16	
	2	(81)×(36)×17	

遺構名	長さ×幅×深さ（cm）	平面形状
ＳＸ１	(399)×133×7	長方形

遺構名	長さ×幅×深さ（cm）	平面形状
ＳＸ２	(256)×(180)×10	方形

遺構名	長さ×幅×深さ（cm）	平面形状
Ｐ１	42×37×12	略円形
Ｐ２	17×16×11	略円形
Ｐ３	29×27×16	略円形
Ｐ４	24×20×11	略円形
Ｐ５	14×13×14	略円形
Ｐ６	23×16×14	略楕円形
Ｐ７	(19)×(16)×11	略楕円形
Ｐ８	25×16×14	略楕円形
Ｐ９	29×22×15	略楕円形

遺構名	長さ×幅×深さ（cm）	平面形状
Ｐ10	29×26×14	略円形
Ｐ11	28×22×6	略楕円形
Ｐ12	36×24×7	略楕円形
Ｐ13	26×25×19	略円形
Ｐ14	37×17×11	長楕円形
Ｐ15	21×17×13	略円形
Ｐ16	23×21×10	略円形
Ｐ17	36×28×17	略楕円形
Ｐ18	28×24×5	略円形

り10～20㎜大のブロックが集合した堆積状態である。粒径１㎜までの白色透明鉱物を極微量に含む。出土遺物としては、ＳＭ２－18から須恵器甕もしくは壺の微細破片がある。

ＳＭ３　小溝状遺構群３（第11・12図、図版３）

調査区中央やや西寄りのＢ－２～４区に分布する。ほぼ南北方向（Ｎ－12°－Ｅ）に列をなす東西方向の小溝15条により構成されている。小溝の長軸方向は（Ｅ－12°－Ｓ）を指す。ＳＭ３－１～７はＳＭ２の西側に並列するが、それ以北のＳＭ３－９～13ではＳＭ２－８～13の軸線が交差してほぼ接する形で交互に小溝が分布するほか、ＳＭ２－10はＳＭ３－10を、ＳＭ２－14はＳＭ３－15を、ＳＭ２－19はＳＭ３－14・15と重複して掘り込まれている。

各々の小溝間隔は0.2～１ｍ前後であるが、0.5ｍ前後を計測するものが多い。小溝状遺構群の延長は11.7ｍ、幅は0.2～0.6ｍ、長さは0.4～１ｍ前後を計測するが、0.8ｍ前後の小溝が主体をなし、深さは10～30㎝前後を測る。

本小溝群の堆積土は、褐色（10YR4/4）を呈する粘土質シルトの単一層である。Ⅳ層を主体として30％程度のⅢ

ｂ層を供給源とする粒径２～20㎜大のブロックが斑文状に分布するほかに、極微量の砂粒を含み、植物の根に鉄分が付着して酸化した細環状の痕跡が顕著である。本小溝状遺構群から遺物は出土していない。

ＳＭ４　小溝状遺構群４（第11・12図、図版３）

調査区の中央東よりのＢ・Ｃ－２～４区に分布する小溝状遺構群であり、ほぼ南北方向（Ｎ－14°－Ｅ）に列をなす東西方向（Ｅ－14°－Ｓ）の小溝14条により構成されている。小溝群の延長は10.5mである。

各々の小溝間隔は0.5m前後、小溝幅は0.2～0.5m前後、深さ0.2～0.3m前後を計測する。断面は浅いＵ字状を呈し、底面には若干の凹凸が認められる。

小溝の長さはＳＭ４－１～８までが3.5m～４m前後、ＳＭ４－９～14が1.2～２m前後である。小溝群は全体的に見れば直線的な配置として捉えることができるが、中央部で屈曲するＳＭ４－２や若干蛇行するＳＭ４－１・５～７、部分的に不連続となるＳＭ４－４が認められる。

小溝群の堆積土は、灰黄褐色（10YR4/2）を呈する粘土質シルトの単一層である。Ⅳ層を主体としてⅢｂ層由来の粒径５～15㎜大のブロックを斑文状に30％程度、極微量の白色鉱物を含み、植物の根に鉄分が付着した細環状の痕跡が顕著である。本小溝状遺構群から遺物は出土していない。

ＳＭ５　小溝状遺構群５（第11・12図、図版３）

調査区南東側のＣ－１・２区から検出した小溝状遺構群である。調査区内では２条の確認であるため詳細は不明確であるが、ほぼ南北に列をなす小溝群であったと考えられる。

小溝群の堆積土は、にぶい黄褐色（10YR3/4）を呈する粘土質シルトの単一層であり、Ⅳ層を主体としてⅢｂ層由来の10～15㎜大のブロックが20％程度の斑文状に認められ、粒径１㎜までの白色鉱物粒子を極微量含み、植物の根に鉄分が付着した細環状の痕跡が顕著である。本小溝状遺構群から遺物は出土していない。

２．性格不明遺構

ＳＸ１・２は調査区北東隅のＣ－５区に隣接して位置し、南側がＳＸ１、北側をＳＸ２とした。遺構検出面はＳＭ１～５と同様にⅣ層上面である。

ＳＸ１・２は小溝状遺構群の北に位置し、特にＳＭ１・２はＳＸ１の南側に隣接した部分で終了しており、それより北側にこれらに続く小溝は調査区内では認められていない。また、堆積土の対比から見ると、ＳＸ１はＳＭ１・２との類似が認められ、一方のＳＸ２はＳＭ３～５との類似が指摘できることから、規模・形状の異なる遺構が関連をもって存在したとの想定も可能であるが、現在までのところ、こうした組み合わせの遺構群の存在は知られておらず、今回はその指摘にとどめておきたい。

ＳＸ１　性格不明遺構１（第９・10図、図版３）

調査区北東のＣ－５区に位置し、南側にはＳＭ１・２、北側にはＳＸ２が隣接する。西側を中世道路跡東側溝に削平され、東側は調査時の側溝により失われている。長軸方向は、ほぼ西北西－東南東を指し、遺構の規模は長軸４m以上、短軸1.5m、深さ0.3mを計測する。長軸規模については、調査区東断面にＳＸ１の堆積土が観察できない事、中世道路東側溝以西には存在しない点から５m程度であったと推定され、平面形は長方形を基調とした形状であったと考えられる。底面はやや凹凸があるもののほぼ平坦で壁は仰角で北側が45°、南側が50°程度の傾斜で立ち上がる。

遺構堆積土は、オリーブ褐色（2.5Y4/6）を呈する砂質シルトの単一層である。Ⅲｂ層を主体とし、粒径10～20

㎜大のⅣ層ブロックが斑文状に、粒径１㎜までの白色鉱物を含み、植物の根に鉄分が付着した細環状の痕跡が顕著である。本遺構から遺物は出土していない。

ＳＸ２　性格不明遺構２（第９・10図、図版３）

調査区北東隅のＣ－５区に位置し、南側にはＳＸ１が隣接する。西側を中世道路跡東側溝に削平され、北側は調査時の側溝により失われている。

遺存状態から長軸はほぼ西北西－東南東を指すものと推定できる。遺構規模は長軸2.5m以上、短軸1.8m以上、深さ0.22mを計測する。短軸規模は調査区北壁断面に本遺構堆積土の存在が観察できない点から最大２m前後であったと推定され、平面形は長方形を基調としたものであったと考えられる。底面はやや凹凸があるもののほぼ平坦であり、壁は仰角60°前後で立ち上がる。

遺構堆積土は、褐色（10YR4/6）を呈する粘土質シルトの単一層である。Ⅲｂ層を主体とし、全体は径５～10㎜大のブロックの集合体であり、30％強のⅣ層と極微量であるが径１㎜までの白色透明鉱物を含む。また、植物の根に鉄分が付着した細環状の痕跡が顕著である。本遺構から遺物は出土していない。

３．ピット（第９図）

Ⅳ層上面では合計18個のピットを検出した。これらのピットの平面形は略円形から略楕円形を呈し、径20～40㎝、深さ10～20㎝とややばらつきがあるが、径30㎝前後、深さ10㎝前後を測るものが主体をなす。

ピットの分布状態は調査区の南側に偏って認められ、調査区南東側のＣ－３区にピット３～８の６基とピット９～11の３基がややまとまりをもった分布を示すが、特に規則的な配置は認められない。また、小溝状遺構との重複があるピット11・17は、いずれも小溝状遺構より新しい。

ピットの堆積土は、いずれもⅢｂ層を主体とする砂質シルト～粘土質シルトの単一層であり、柱痕跡が存在する例は認められない。また、ピットから遺物は出土していない。

第３節　Ⅴ層上面検出遺構

Ⅴ層上面では４群からなる小溝状遺構群（ＳＭ６～９）、ピット27個を検出した。小溝状遺構群はいずれもほぼ南北方向に列をなし、ほぼ東西方向の小溝により構成されている。群別については、小溝と小溝の間隔、方向、分布、重複関係、堆積土の対比等から判断した。検出した小溝総数は21条であり、上述群別方法により各々の小溝状数はＳＭ６－９条、ＳＭ７－７条、ＳＭ８－３条、ＳＭ９－２条である。

ピットは小溝の方向に合わせるような配置をとるが、明確な規則性を捉えることはできない。小溝と重複する例があるが、いずれもピットが小溝より新しい。

１．小溝状遺構群

ＳＭ６　小溝状遺構群６（第13・14図、図版４・５）

Ａ～Ｃ－１～５に分布する。ほぼ南北方向（Ｎ－12°－Ｅ）に列をなす東西方向（Ｅ－12°－Ｓ）の小溝９条により構成される。小溝間隔は1.5m前後であり、小溝両端はいずれも調査区外へ延びている。各々の小溝はほぼ直線的に掘り込まれているが、ＳＭ６－１・５・６・８の様に若干の蛇行や湾曲する小溝も認められる。

小溝の幅は0.3～0.5m、深さ0.1～0.4mを計測し、断面はＵ字状もしくは浅いＵ字状を呈する。底面には若干の凹凸があり、小溝掘削時の三日月状を呈する工具痕と推定される掘り込みが認められた。なお、ＳＭ６－４の底面

には掘り込みの残存状況の良い部分が認められたことから、その部分についてのみ精査を行った（写真図版５－２）。

本小溝群の北側に位置するＳＭ６－８はＳＭ８－１と重複関係にあり、新旧関係は古→新の順でＳＭ６→ＳＭ８である。

本小溝群の堆積土は、暗褐色（10YR3/4）を呈する粘土質シルトの単一層である。層の構成はⅣ層を主体として粒径５～10㎜大のⅤ層粒を斑文状に含んでいる。本小溝状遺構群から遺物は出土していない。

ＳＭ７　小溝状遺構群７（第13・14図、図版４・５）

調査区西側のＡ－１～４区に分布する。ほぼ南北方向（Ｎ－11°－Ｅ）に列をなす東西方向（Ｅ－11°－Ｓ）の小溝７条により構成される小溝状遺構群である。小溝間隔は1.5～２ｍ前後であり、小溝東端部が存在するが西側は調査区外に延びている。各々の小溝は直線的に掘り込まれている。

小溝の幅は0.2～0.3m、深さ0.1～0.2m前後を計測し、断面は浅いＵ字状もしくは皿状を呈する。底面はほぼ平坦であるが、若干の凹凸面を有する。今回検出した小溝群の内、最も幅狭の小溝群である。

本小溝群の堆積土は、にぶい黄褐色（10YR4/3）を呈する粘土質シルトの単一層であり、粒径５～20㎜大のⅣ層とⅤ層がブロック状に構成される混土層である。本小溝状遺構群から遺物は出土していない。

ＳＭ８　小溝状遺構群８（第13・14図、図版４）

調査区北側のＢ・Ｃ－４・５区に分布する。ほぼ南北方向（Ｎ－13°－Ｅ）に列をなす東西方向（Ｅ－13°－Ｓ）の小溝３条により構成される小溝状遺構群である。小溝間隔はＳＭ８－１～２間が２ｍ、ＳＭ８－２～３間が３ｍである。ＳＭ８－１では小溝東端部が、ＳＭ８－２・３では小溝西端部が確認できるが、ＳＭ８－１の西側とＳＭ８－２・３の東側はそれぞれ調査区外に延びている。

小溝の幅は0.3～0.4m、深さ0.2～0.3mを計測し、断面形は浅いＵ字状を呈する。

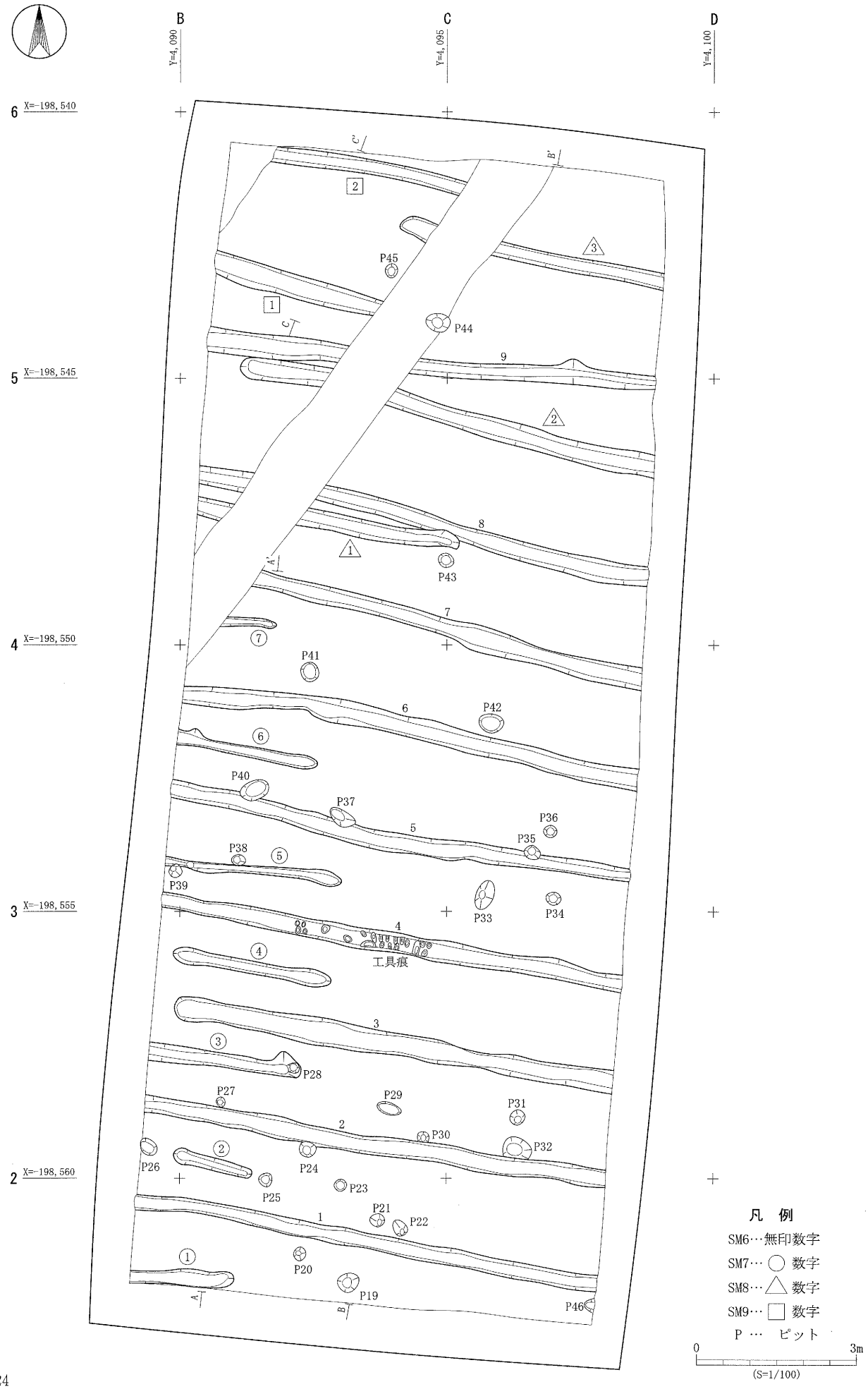
本小溝群南端のＳＭ８－１はＳＭ６－８と重複関係にあり、古→新の順でＳＭ６→ＳＭ８である。

本小溝群の堆積土は、暗褐色（10YR3/4）を呈する粘土質シルトの単一層であり、粒径10～30㎜大のⅣ層を主体とし、10％程度の粒径５～10㎜大のⅤ層粒を斑文状に含む。本小溝状遺構群から遺物は出土していない。

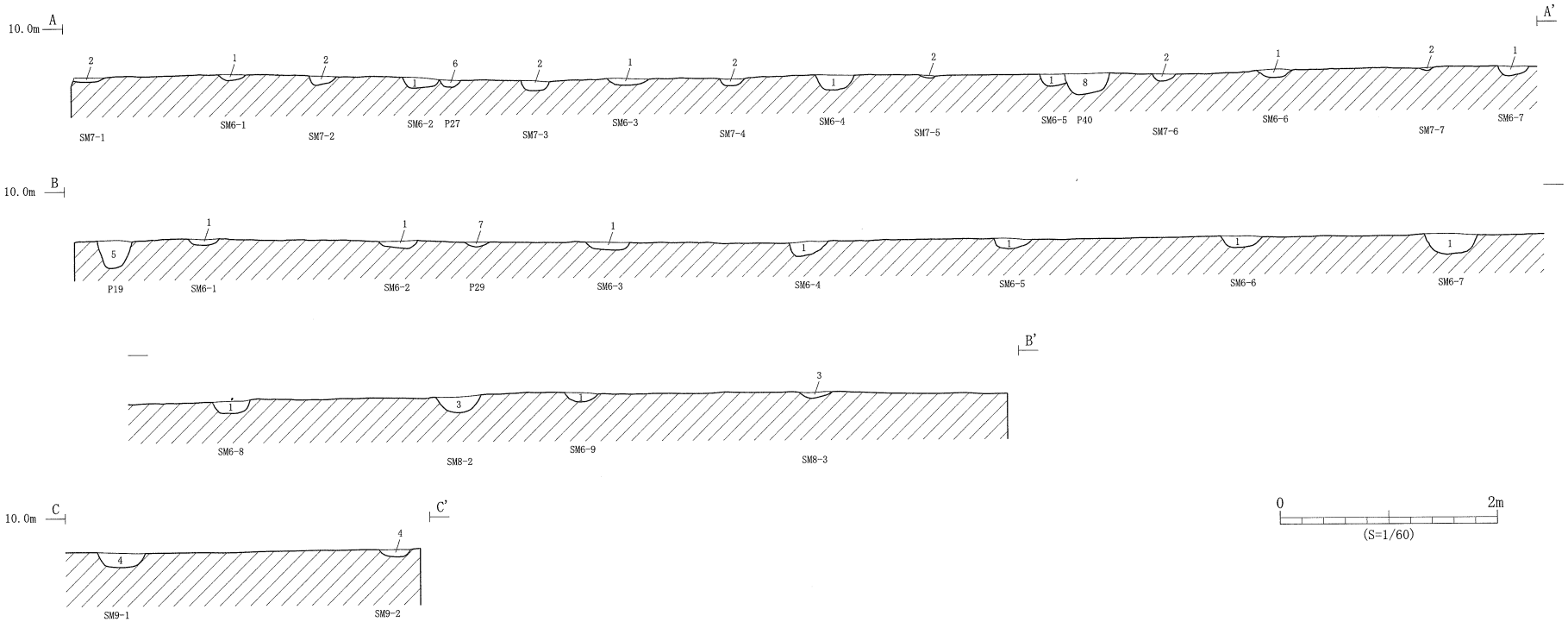
第３表　Ⅴ層上面検出遺構観察表

遺構名	溝番号	長さ×幅×深さ（cm）	特　　徴
ＳＭ６	1	(880)×32×26	
	2	(875)×32×18	
	3	(833)×42×17	
	4	(879)×30×15	底面に工具痕確認。
	5	(878)×28×15	
	6	(865)×37×26	
	7	(745)×40×19	
	8	(863)×39×33	
	9	(846)×30×30	
ＳＭ７	1	(195)×31×4	
	2	151×23×4	
	3	(288)×32×18	
	4	300×33×8	
	5	(332)×29×7	
	6	(267)×20×8	
	7	(102)×15×6	
ＳＭ８	1	(495)×33×49	
	2	(798)×44×33	
	3	(501)×41×16	
ＳＭ９	1	(318)×50×17	
	2	(361)×31×12	

遺構名	長さ×幅×深さ（cm）	平面形状
Ｐ19	41×35×15	略円形
Ｐ20	26×22×25	略円形
Ｐ21	28×25×27	略円形
Ｐ22	33×26×21	略楕円形
Ｐ23	23×23×5	略円形
Ｐ24	31×28×18	略円形
Ｐ25	27×26×4	略円形
Ｐ26	36×27×10	略楕円形
Ｐ27	20×17×6	略円形
Ｐ28	(21)×19×23	略円形
Ｐ29	47×24×3	長楕円形
Ｐ30	21×(19)×6	略円形
Ｐ31	30×28×32	略円形
Ｐ32	54×(40)×19	略円形
Ｐ33	57×33×24	長楕円形
Ｐ34	29×25×8	略円形
Ｐ35	31×25×15	略円形
Ｐ36	25×23×12	略円形
Ｐ37	50×28×26	略長楕円形
Ｐ38	27×22×16	略円形
Ｐ39	24×24×28	略円形
Ｐ40	55×35×14	楕円形
Ｐ41	38×34×6	略円形
Ｐ42	47×37×3	略円形
Ｐ43	30×26×18	略円形
Ｐ44	46×35×22	略楕円形
Ｐ45	27×24×7	略円形
Ｐ46	27×(19)×22	楕円形？



第13図　Ⅴ層上面遺構平面図



遺構	層位	土色	土性	備考
SM6	1	10YR3／4 暗褐色	粘土質シルト	Ⅳ層ブロック主体、Ⅴ層ブロックを少量含む。
SM7	2	10YR4／3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	Ⅳ層とⅤ層の混合土、ブロック構成。
SM8	3	10YR3／4 暗褐色	粘土質シルト	Ⅳ層主体、Ⅴ層を含む。斑文状。
SM9	4	10YR4／3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	Ⅴ層主体、Ⅳ層を含む。ブロック・斑文状。
P19	5	110YR3／3 暗褐色	粘土質シルト	Ⅳ層ブロック主体、Ⅴ層ブロックを少量含む。
P27	6	110YR3／3 暗褐色	粘土質シルト	Ⅳ層ブロック主体、Ⅴ層ブロックを少量含む。
P29	7	110YR3／3 暗褐色	粘土質シルト	Ⅳ層ブロック主体、Ⅴ層ブロックを少量含む。
P40	8	110YR3／3 暗褐色	粘土質シルト	Ⅳ層ブロック主体、Ⅴ層ブロックを少量含む。

第14図　Ⅴ層上面遺構断面図

ＳＭ９　小溝状遺構群９（第13・14図、図版４）

調査区北西側のＢ－５区に分布する。ほぼ南北方向（Ｎ－14°－Ｅ）に列をなす東西方向（Ｅ－14°－Ｓ）の小溝２条により調査区内では構成されている。中世道路跡東側溝にＳＭ９－１・２とも東端部を削平されているが、西側は調査区外に延びていた。小溝間隔は２ｍ前後である。ＳＭ９－１の小溝幅は0.5ｍ、深さ0.2ｍ、ＳＭ９－２の小溝幅は0.3ｍ、深さ0.1ｍを計測し、断面形は浅いＵ字～皿状である。

本小溝群の堆積土は、にぶい黄褐色（10YR4/3）を呈する粘土質シルトの単一層であり、粒径３～15㎜大のＶ層を主体に20％程度の粒径５～20㎜大のⅣ層粒を斑文状に含んでいる。本小溝状遺構群から遺物は出土していない。

２．ピット（第13図）

Ｖ層上面では合計28個のピットを検出した。これらのピットの平面形は、略円形・略楕円形・略長楕円形を呈するものが認められ、その規模は径30～60㎝、深さ10～30㎝とばらつきがあるが、径30～50㎝、深さ20㎝前後が主体をなす。各ピットの分布状況としては、特に規則性を持つ配置は認められないが、あえてあげればＳＭ６－２の北壁に掘り込まれたピット27・30・32とＳＭ６－５の北壁に掘り込まれたピット35・37・40は小溝状遺構との関連が指摘できる可能性があるが、いずれもピットが小溝状遺構より新しい。

ピットの堆積土は、Ⅳ層を主体とする粘土質シルトの単一層であり、柱痕跡が残存する例は認められない。また、ピットからの遺物の出土も認められなかった。

第４節　出土遺物（第15図）

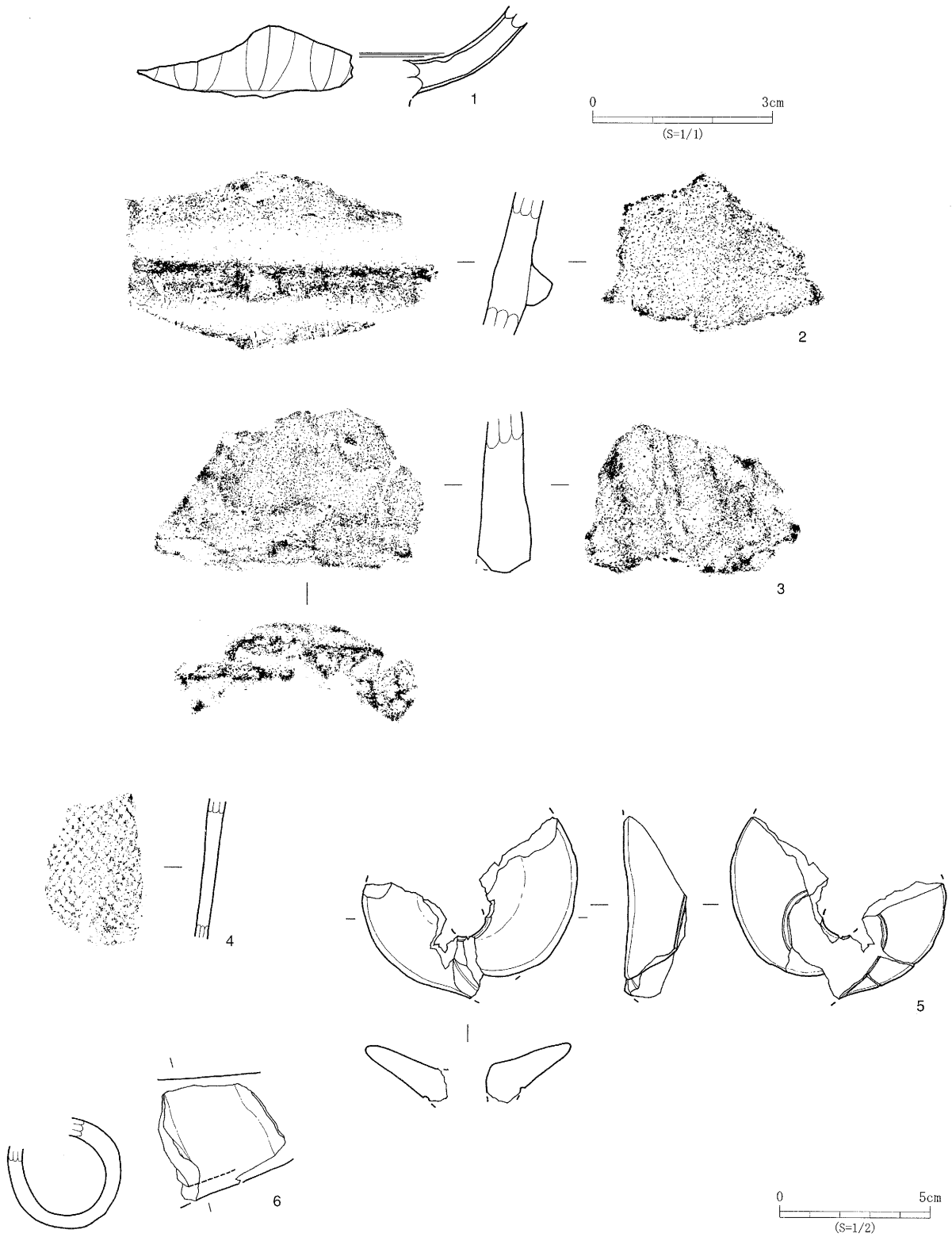
今回の発掘調査により出土した遺物総数は合計36点であり、その内訳は縄文土器５点、須恵器７点、土師器10点、埴輪片13点であった。遺物はいずれも細片であり、土師器と埴輪はローリングによる摩滅が著しい。遺構からの出土遺物としてはＳＭ２－18より須恵器１点、中世道路遺構の路面から須恵器３点、土師器２点、中世道路遺構の東側溝（ＳＦ１旧期）から龍泉窯青磁碗破片１点、中世道路遺構の東側溝（ＳＦ２期）から埴輪３点が検出された。これらの遺物の内、遺構の時期との関連性が認められる遺物としては、中世道路遺構の東側溝（ＳＦ１旧期）から出土した青磁碗破片１点があげられる。なお、出土遺物の掲載にあたっては遺構と遺構外とに項目を分けることも考えたが、図化できる遺物が６点と少ないため一括して報告することとした。

１はＳＦ－１旧期東側溝の堆積土下層から出土した龍泉窯系青磁碗の体部下位細片である。現存高1.5㎝を測る。黒色微粒子を含有する胎土は灰白色を呈し堅緻。外面は鎬蓮弁文をヘラ状工具による片彫りで施す。内外面に厚く施す釉は緑灰色に発色し、外面は細貫入を生じる。太宰府陶磁器分類（山本他 2000）のⅡ－ｂ類に比定でき、13世紀初頭前後から前半の所産と考えられる。中世道路跡と関連する遺物である。

２はＳＦ２期東側溝堆積土から出土した円筒埴輪片である。全体に摩耗が著しい体部上半の破片であり、凸帯上端に貼付時のナデ調整が認められるが、下端は不明瞭である。周辺の古墳から流入した遺物と考えられる。３はⅡ層から出土した円筒埴輪基部破片である。内外面とも摩耗が著しいが、内面に縦から斜位のナデ調整痕が認められる。

４はⅡ層から出土した縄文土器である。体部破片で器厚は５㎜程度と薄く、胎土に白色透明・黒色鉱物粒子を含有する。２段の縄文ＲＬが横位回転施文されている。縄文時代後期の所産と推定される。

５はⅦ層から出土した「の」の字状に捻転する口縁部突起破片であり、朝顔状に開く断面形を有する。裏面にも円形に沈線が施される。縄文時代後期中頃の製品と考えられる。６もⅦ層から出土した縄文時代後期の所産と考えられる注口土器注口部破片である。外面は丁寧に研磨され、平行する浅い沈線がめぐる。



挿図番号	図版番号	出土位置	層　位	種　別	特　徴　等	登録番号
第15図１	図版５－５－１	ＳＦ１旧東溝	下　層	磁　器	龍泉窯系青磁碗。Ⅱ－ｂ類。体部下位破片。外面にヘラ状工具による蓮弁文（３弁遺存）、内面に体部・見込の境界に圏線１条。胎土は堅緻で黒色粒子を微量含み灰白色。釉は内外面とも厚く、光沢質・半透明の緑灰色。外面に細貫入。焼成は良好。	Ｊ００１
第15図２	図版５－５－２	ＳＦ２東溝	下　層	円筒埴輪	体部上半破片。摩耗著しい。凸帯上端に体部貼付け時のナデ。凸帯下端は未調整。	Ｓ００１
第15図３	図版５－５－３		Ⅱ　層	円筒埴輪	基部破片。摩耗著しい。内面に縦～斜位の幅広なナデ。	Ｓ００２
第15図４	図版５－５－４		Ⅱ　層	縄文土器	体部破片。縄文ＲＬ。後期？	Ａ００１
第15図５	図版５－５－５		Ⅶ　層	縄文土器	「の」の字状に捻転した突起の破片。断面は朝顔形。後期中葉。	Ａ００２
第15図６	図版５－５－６		Ⅶ　層	縄文土器	注口部破片。外面は丁寧に研磨。両端に棒状工具による平行沈線。後期？	Ａ００３

第15図　出土遺物

第Ⅵ章　ま　と　め

今回の発掘調査により検出された主要な遺構は、基本層序Ⅱａ層上面が検出面となる中世主要道路跡（推定「奥大道」）、Ⅳ層上面を検出面とする５群構成の小溝状遺構群、Ⅴ層上面を確認面とする４群構成の小溝状遺構群であった。

中世主要道路跡は、路面となる砂を主体とした数枚の硬化層及び波板状凹凸とその両側に平行する側溝により構成されている。王ノ壇遺跡第２次調査との比較のため、第16図①に今回の調査により検出された道路跡と王ノ壇遺跡第２地点（以下、第２地点）の道路跡を図上で合成した。最も古いＳＦ２期西側溝の大半は今回の調査範囲外となり、第２地点との間に５～６ｍの未調査区が存在するものの、全体的に見ればその規模や延長方向からこれらが同一の道路を構成していたことは明らかであろう。

ただし、第２地点の西側溝最新段階はＳＦ１新期とした側溝であり、今回の調査では第２地点ＳＦ１新期西側溝の延長線上にある側溝（ＳＦ１新期西側溝）より新しい側溝（ＳＦ１新期西の東側溝）が存在する点が新たな知見と言えるが、側溝の浚渫や路面の補修作業により長大な主要道路が長期にわたり維持・管理されていた事による地点毎のあり方と理解することが可能な差異と捉えられよう。

中世道路跡の時期を示す遺物としては、ＳＦ１旧期東側溝下層より13世紀初頭前後～13世紀前半代の中国龍泉窯産蓮弁文青磁碗の小破片が１点出土している（第15図－１，写真図版５－５－１）。

Ⅳ層上面で検出した５群の小溝状遺構群（ＳＭ１～５）は、南北に列をなす東西方向の溝により構成されている。これらの小溝は、重複関係・分布及び堆積土の特徴から大きく新旧に分けることが可能であり、ＳＭ１・２が新しくＳＭ３～５が古い小溝群と考えられる。しかし、これら小溝群の遺構分布や確認面が同一のⅣ層上面であったことを考えると、その時期差は比較的短期間であったと考えられる。また、Ⅳ層上面検出の小溝状遺構群は、Ⅴ層上面検出の小溝状遺構群と比べてその長さが１～４ｍと短い事を特徴としている。

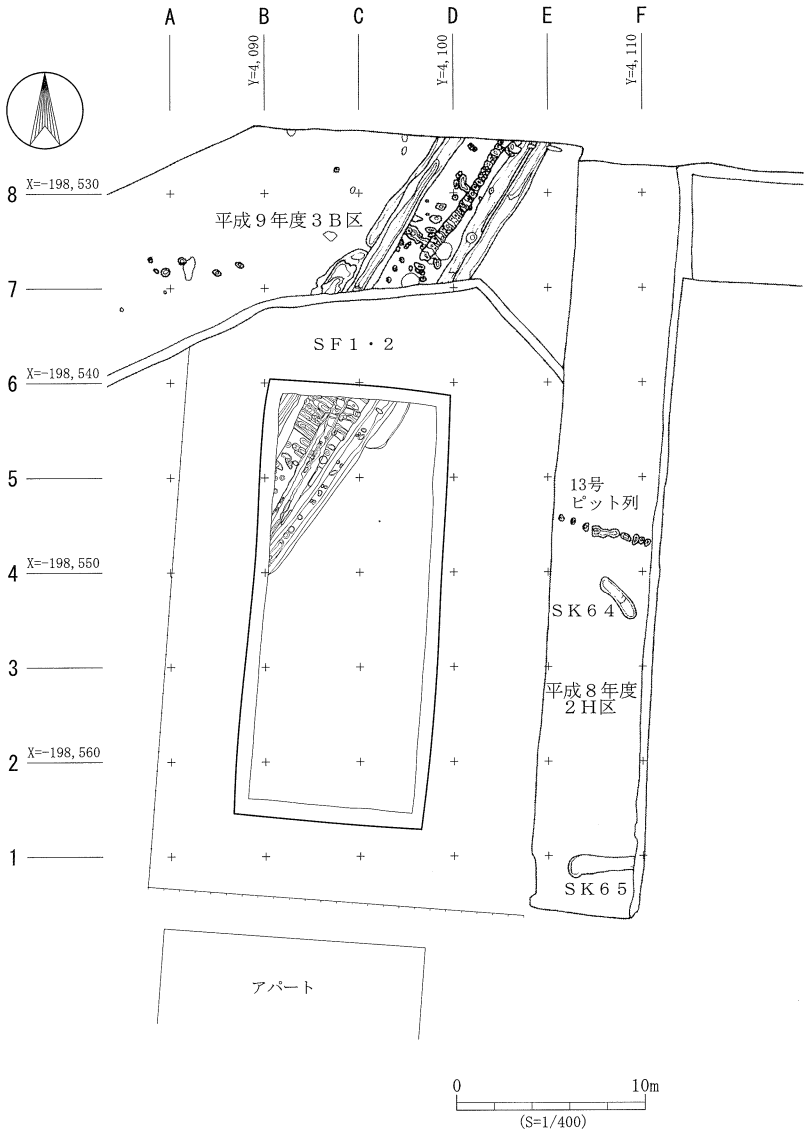
Ⅴ層上面検出の小溝状遺構群は、畑耕作に関連する遺構と推定されており、Ⅳ層上面検出の小溝状遺構群についてもⅤ層検出の小溝と同様に畑耕作に関連する遺構であると考えられる。

これらⅣ層上面検出の小溝状遺構群の時期は、出土遺物がごく僅かな細片であったことからこれらの遺物から判断することはできなかった。しかしながら、標準土層堆積土のⅢａ層中～上位には10世紀前半に降灰したとされる灰白色を呈する十和田Ａ火山灰を含んでおり、小溝群堆積土はⅢｂ層を主体としてⅢａ層を含まないことからその降灰以前の遺構との推定は可能である。

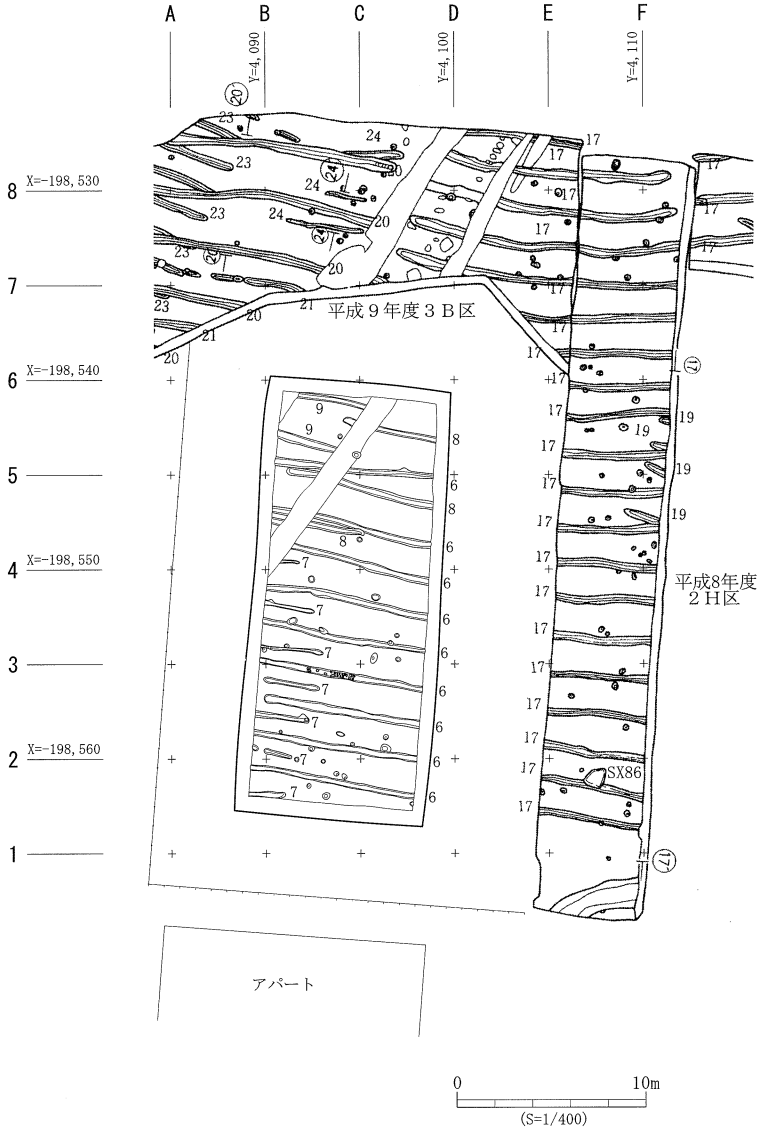
周辺遺跡の調査での類似遺構としては、今回の調査地点の西側に隣接する大野田古墳群３Ｃ区のⅣ層上面より今回の小溝群とほぼ同方向の遺構が１列、大野田古墳群１Ａ～Ｃ・Ｅ、２Ａ区のⅢ層上面から27例報告されているが、これらの遺構群についてはピット列と呼称されている。

Ⅴ層上面からは、東西方向の小溝を南北方向に並列させた４群からなる小溝状遺構群（ＳＭ６～９）が検出された。小溝状遺構群は畑の耕作に関する痕跡と考えられる遺構であり、六反田遺跡（田中他 1981）の報告で命名された遺構群名である。小溝状遺構群は、これまでの周辺での発掘調査からは大野田古墳群全域にわたり高密度で分布することが知られており、その方向はほぼ南北及び東西に限定され、それぞれが重複（新旧）関係を持つ例も認められる。

第16図②は大野田古墳群２Ｈ区・３Ｂ区（以下、２Ｈ区・３Ｂ区）のⅤ層上面検出の小溝状遺構と今回調査のⅤ層上面小溝状遺構群を合成したものである。これによると、２Ｈ区は今回の調査区の東側、３Ｂ区は北側に隣接し、本調査区との間には約５ｍの未調査区が存在するものの、今回検出した小溝状遺構群の内のＳＭ６・８は２Ｈ区で小溝状遺構群17とされた小溝群に連結する可能性が高い。今回の調査区と２Ｈ区を合わせても小溝の両端が確認で



①（Ⅱ層上面検出遺構）



②（Ⅴ層上面検出遺構）

第16図　近隣の成果との対応関係（仙台市文化財調査報告書第243集を転載し合成）

きず、各々の小溝は少なくとも20m以上の長さを有していたと考えられる。

一方で、小溝東端部が検出されているＳＭ７は隣接調査区が西側30mと離れるために連結関係が明らかではないが、小溝群の方向・間隔等から今回新たに検出した遺構と考えられる。また、ＳＭ９は３Ｂ区の小溝状遺構20もしくは21と連結する可能性があるが、未調査区間隔が広いために確定はできない。

以上、今回の調査で検出した各層の遺構につき概述した。これら検出遺構はこれまで行われた周辺地点との間に大きな異なりは認められないものの、Ⅳ層上面での小溝状遺構群（ピット列）はこの層での検出遺構が少ないだけに一つの成果と言える。

基本層の堆積は、大野田古墳群域が名取川・笊川の影響を受けた河川堆積層を主にしていることから、調査地点毎の各層の対比は可能であるが、層厚や色調・土性等に若干の差が存在する。また、Ⅴ層上面を検出面とする小溝状遺構群が全域にわたり高密度に分布するため、小溝の主要堆積土となるⅣ層の堆積が不安定な部分もあり、地点毎の偏差が認められる。このため、遺構検出面（本次調査はⅤ層上面）もⅣ層上面・Ⅳ層中位・Ⅴ層上面と地点毎にばらつきが存在する点も今後の検討課題と言える。

引用・参考文献

小川淳一・高橋綾子　2000『仙台市文化財調査報告書第249集　王ノ壇遺跡－都市計画道路「川内・柳生線」関連遺跡－発掘調査報告書Ⅰ』仙台市教育委員会

工藤信一郎・利屋勉・土岐耕司　2007『仙台市文化財調査報告書第315集　長町駅東遺跡第４次調査－仙台市あすと長町土地区画整理事業関係遺跡発掘調査報告書Ⅰ［第１分冊］』仙台市教育委員会

佐藤　淳・湯原勝美・戸部孝一　2005『仙台市文化財調査報告書第290集　大野田古墳群－第８次発掘調査報告書－』仙台市教育委員会

佐藤　淳・黒田恵之・東野豊秋　2005『仙台市文化財調査報告書第291集　大野田古墳群　第９次発掘調査報告書』仙台市教育委員会

仙台市教育委員会　2007『大野田古墳群12Ａ区・12Ｄ区発掘調査現地説明会資料』

主浜光朗　2000『仙台市文化財調査報告書第245集　鍛冶屋敷Ａ遺跡・鍛冶屋敷前遺跡－市道「富田富沢線」関連遺跡発掘調　査報告書－』仙台市教育委員会

田中則和他　1981『六反田遺跡発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第34集

渡邊　誠・竹田幸司　2000『仙台市文化財調査報告書第243集　大野田古墳群・王ノ壇遺跡・六反田遺跡　仙台市富沢駅周辺　区画整理事業関係遺跡　発掘調査報告書Ⅰ』仙台市教育委員会』

山本信夫他　2000『太宰府条坊ＸＶ－陶磁器分類編－』「太宰府市の文化財第49集」太宰府市教育委員会

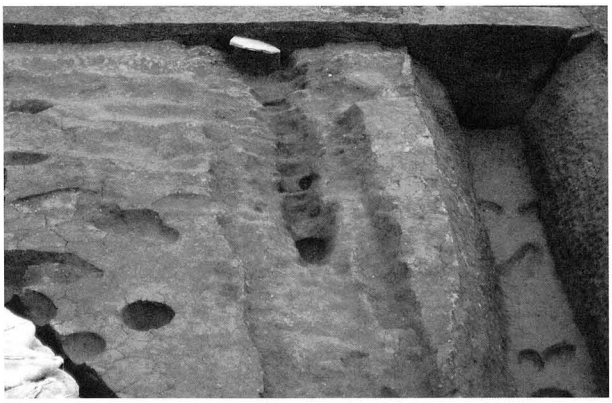
写　真　図　版

1．SF 1（新）全景（南西から）

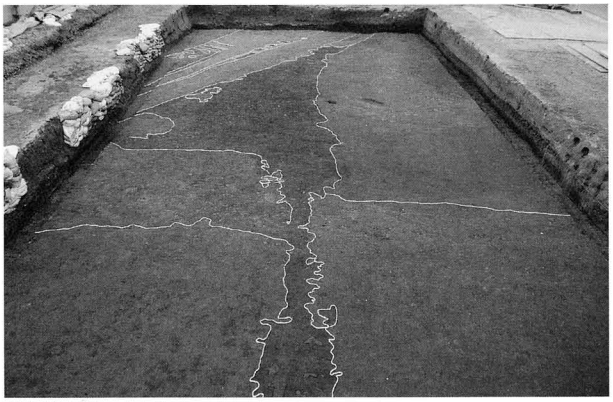
2．SF 1・2 全景（南西から）

写真図版 1

1．SF１・２土層断面（C－C'）（南西から）



2．SF１・２土層断面（B－B'）（南西から）

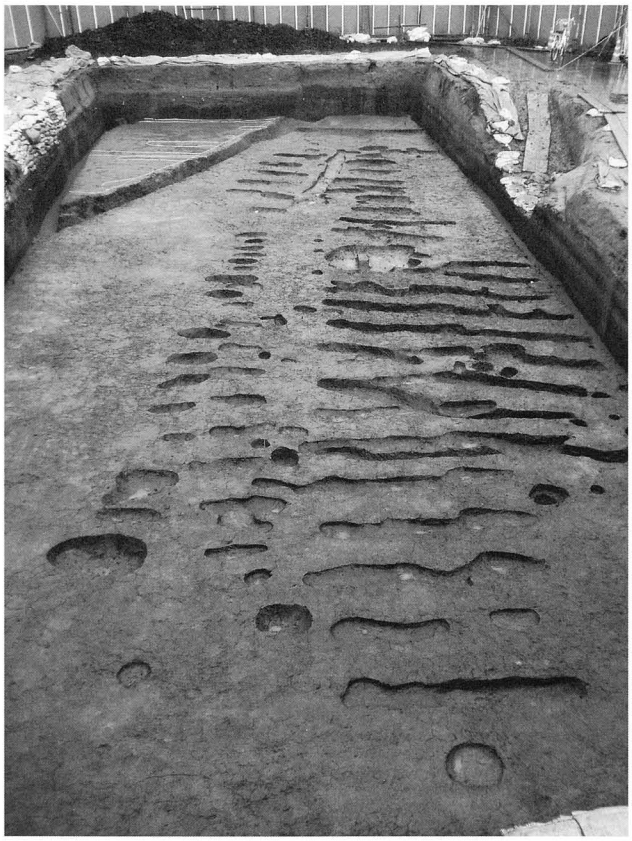


3．SF１・２検出状況（南から）

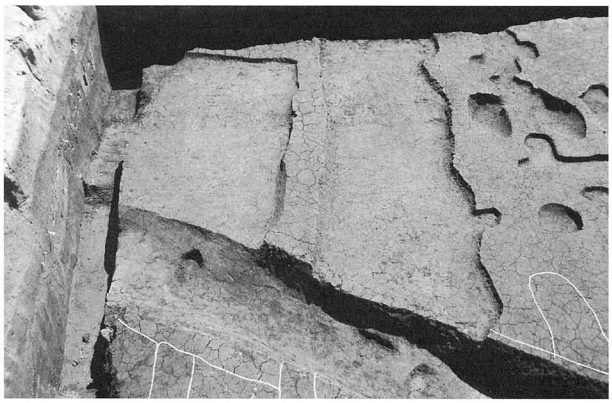
4．SF１・２検出状況（北東から）

5．Ⅳ層上面SM１・２完掘全景（南から）

写真図版２



1．Ⅳ層上面SM１～５完掘全景（南から）



2．Ⅳ層上面SX１・２完掘全景（西から）

3．Ⅳ層上面SM１－21～33土層断面（東から）

4．Ⅳ層上面SM３－７・８土層断面（西から）

5．Ⅳ層上面SM１～５検出状況（南から）

写真図版３

1．Ⅴ層上面SM６～９完掘全景（北から）

2．Ⅴ層上面SM６～９完掘全景（南から）

写真図版４

1．Ⅴ層上面SM６・７－１・２土層断面（A－A'）（東から）

2．Ⅴ層上面SM６－４底面工具痕（東から）

3．調査区西壁土層堆積状況（東から）

4．調査区東壁土層堆積状況（西から）

5．出土遺物

写真図版５

報告書抄録

ふりがな	おおのだこふんぐん
書名	大野田古墳群
副書名	第13次発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書
シリーズ番号	第319集
編著者名	主浜光朗・工藤信一郎・小林義典
編集機関	仙台市教育委員会
所在地	〒980－8761　宮城県仙台市青葉区国分町3丁目7番1号　Tel 022－214－8894
発行年月日	2008年2月29日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
大野田古墳群（おおのだこふんぐん）	宮城県仙台市太白区大野田字王ノ檀31街区2画地（みやぎけんせんだいしたいはくくおおのだあざおおのだんがいくかくちち）	04100	01361	38°12′41″	140°52′48″	2007.07.17～2007.08.31	231㎡	事務所付共同住宅（(仮称)DC王ノ檀マンション）建設工事に伴う埋蔵文化財の事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大野田古墳群	道路跡 畑跡	古墳～中世	道路跡 小溝状遺構群	縄文土器、土師器・須恵器 埴輪片、龍泉窯青磁片	

仙台市文化財調査報告書第319集

大野田古墳群

－第13次発掘調査報告書－

平成20年2月

発行　仙台市教育委員会
仙台市青葉区国分町3丁目7番1号
仙台市教育委員会文化財課
TEL　022－214－8894

印刷　㈲平電子印刷所
福島県いわき市平北白土字西ノ内13番地
TEL　0246－23－9051